

## 岡山市方言の複合動詞のアクセント\*

高山 林太郎

キーワード: 山陽地方 岡山県岡山市 広島県尾道市 日本語 アクセント 複合動詞  
連用形 終止形 意味と音調句 核と句の喪失 核の保存 山田の法則

### 要旨

前部要素中または後部要素との境界に核がある複合動詞のアクセントを「前部アクセント」、全体として次末核または無核のものを「後部アクセント」と呼ぶことにする。東京では表出的な一部の語彙を除けば後部アクセントが支配的である。但し、前部要素が平板型なら後部アクセントは次末核型に、起伏型なら無核型になるという、所謂「山田の法則」が存在する。他方で、東京とよく似たアクセント体系を有する山陽地方では、前部要素の核を保存する前部アクセントとそうでない後部アクセントとが一定の割合で共存していて、地点によっては今後「山田の法則」が成立する可能性がある。東京の周辺地域の証拠から、東京でも古くは山陽地方のような複合動詞アクセントだったと考えられる。本稿は第一に、2 単位形から前部アクセントへの変化と前部アクセントから後部アクセントへの変化は、後部要素と前部要素の核と音調句の喪失であり、意味を原因とする音調句の一体化であると説明する。第二に、前部要素が平板型で後部要素との境界に核があるタイプが無核化できないのは、共時的には前部要素の核ではないからだと説明する。第三に、次末核化より無核化が著しく先行しなければ「山田の法則」は成立しないと指摘する。

### 1. はじめに

『東京大学言語学論集』11 号(1991.03)に載る「1990 年度修士論文・卒業論文題目一覧および修士論文要旨」の中に澤田雅司『山陽地方の複合動詞のアクセント』(1990.12; 修士論文)の要旨が存在する。その澤田(1990)を審査したのが上野善道(元・東京大学教授)であり、筆者は上野先生と澤田雅司氏ご本人から、澤田(1990)が書かれるに至った調査研究の方法を学び、本稿を記した。ゆえに本稿は、基礎的な方法論を澤田(1990)と同じくしている<sup>1</sup>。

澤田(1990)の要旨には「山陽地方 8 か所」で複合動詞のアクセントを現地調査したと書かれている(「山陽地方」は山口県、広島県、岡山県を指す)。この調査に用いられた調査項目は

\* 筆者が本稿の問題に取り組んだきっかけは 2011 年度冬学期の松森晶子先生の授業であり、松森先生および上野善道先生とのやりとりを通じて先行研究を探し当てて行った。澤田(1990)という重要な先行研究の存在は、澤田の指導教官であった上野から知り、2 月 17 日には澤田雅司氏から直接ご助言・ご指摘をいただく機会を得た。左記の 3 名の方々には、筆者が今回初めてアクセント研究に取り組むきっかけをいただいたばかりでなく、本稿の問題に取り組むに当たって様々なご助言・ご指摘をいただいた。ここに厚く御礼申し上げる。

また、岡山市の方言話者の皆様、「妹尾を語る会」の皆様、妹尾公民館・妹尾地域センターの皆様、尾道市の方言話者の皆様、尾道市教育委員会文化財係の皆様、山陽日日新聞社の皆様、久保八幡宮にお集まりの皆様、「きら尾道」の皆様、その他、様々な調査にご協力いただいた皆様方に厚く御礼申し上げる次第である。

<sup>1</sup> 但し、問い合わせたところ澤田雅司氏から澤田(1990)の利用許可は得られなかった。本稿では主にその「要旨」より引用するが、筆者が上野と澤田より直接知ることのできた情報や論点は「要旨」よりも多い。

澤田が上野から譲り受けたものであり、筆者もこれとほぼ同じものを用いて、以下に挙げる A から H までの 7 名の話者（敬称略）で、主に 2012 年 1 月頭から 2 月末に掛けて調査した<sup>2</sup>。

- A (1/04-08) 岡山市北区内山下 たかやますみこ 高山澄子 1949/2/17 生れ；18 歳からは東京へ；筆者の母  
 B (2/03) 広島県尾道市西久保町 1936/12/12 生れ；「[居]て」と発音（尾道市は同様）  
 C (2/14-15) 岡山市南区妹尾榎屋町 いももとたもつ 今本 完 1932/4/14 生れ；「[居]て」と発音（岡山市は同様）  
 D (2/15) 岡山市南区妹尾白浜町 うちだえいじ 内田栄二 1937/8/01 生れ  
 E (2/26) 岡山市南区妹尾峰 矢吹忠志の姪 1943/1/09 生れ  
 F (2/27) 岡山市南区妹尾白浜町 やぶきただし 矢吹忠志 1927/6/15 生れ  
 A (2/28) 2 回目調査；1 回目は内省調査で 2 回目は読み上げ調査。  
 G (2/29) 岡山市南区妹尾中村 しろぐちかんじ 城口寛治 1932/5/05 生れ；話者 A から G はこの順で調査。  
 H (5/25) 岡山市南区妹尾南之町 みつよしひでたろう 光吉秀太郎 1928/9/15 生れ；平板型終止形、連用形の核を調査。

音調の仕組みは全地点で一致しており、句音調と下げ核で音調が決まる。句音調の音声実現には若干の地域差があるかもしれないが、弁別的特徴である核の有無と位置だけを（録音しつつ）聞き取り、記述している。「動詞連用形＋動詞」という構成の複合動詞の終止形をリストにして話者に順次読み上げていただき、433 語を分析の対象とした。まずは前部要素に「て」の付く形を読み上げていただき単独での核を調査した。続いて、左に読みをひらがなで、右に漢字の表記を記したものを、適宜両方を参照しながら読み進んでいただいた。

データの解釈に関連して注意すべき「系列効果」について次に簡単に述べる。1 語に複数のアクセントがある複合動詞などの場合、リスト上で先行する語からの類推によってアクセントが次々に同じになってしまうことが時としてある。このようにある行動が直前の文脈に影響を受けることを系列効果と呼ぶ。揺れの大きい現象を扱う場合、系列効果は無視できない。また単に 1 語に複数のアクセントがあるというだけでなく、複数のアクセントの間の出現頻度の違いについても考慮する必要がある。これらの問題点をできる限り解消する手段として、第一に筆者の岡山市での調査では同じリストを正順、逆順、正順、逆順で計 4 回読んでいただいた。第二に問題を個々の語彙から全体に占める度数・割合へと巨視化するような分析を実施した。

話者 A から G までのデータの一部を掲載した表 1（後述）の記号は次のようになっている。

- 番号： 通し番号。 前拍： 前部要素のモーラ数。 全拍： 全体のモーラ数。  
 かな： 表記が仮名。 漢字： 表記が漢字仮名交じり。 +： 複合語の内部境界位置。  
 X 前： 前部要素の核の位置（前から n モーラ目）；話者 X の場合。X は A から G。  
 X 正： 複合語の核の位置（正順にリストを読んだ時）；話者 X の場合。X は A から G。  
 今回、話者 B は「B 正」1 回のみ。  
 X 逆： 複合語の核の位置（逆順にリストを読んだ時）；話者 X の場合。X は A から G。

<sup>2</sup> その後更に広島県尾道市、東京都東村山市で同様の調査を実施したが、それらの分析は別稿に譲る。

0: 無核。但し平板型終止形の語末核の有無は未調査で、地点により語末核のことも。

1, 2, 3, 4: 前から n モーラ目に核があることを表わす。語末核を表わすことはない。

平板型動詞の終止形の語末核については、終止形に様々な助詞が接続した場合を調べ、無核と有核の方言に分類することができる。例えば話者 A, H は「聞[く]とこ[たえ]る」などと発音するため、有核となる。但し、本稿の議論でこの語末核の有無が効いてくることはない。

「吹っ込む」「吹っ飛ぶ」「踏ん張る」「突っ走る」「引っ込みます」で「2」が観察された場合、音声的には「2」だが、筆者の調査したデータでは前部要素が起伏型なら「1」、平板型なら「2」で記述した。従って「吹っ込む」「吹っ飛ぶ」に関しては音声そのままではない。

表 1 (後述) では 1 単位形アクセントのデータを扱い、それにより「複合動詞の 2 型化」の原因や「山田の法則」が成立するための条件などを考察するが、それに先立って、次節では 2 単位形アクセントのデータを扱い、「複合動詞の 1 単位形化」の原因や条件を考察する。

## 2. 岡山市方言の複合動詞の 2 単位形アクセント

岡山市南区妹尾の話者 C, D, E, F, G および岡山市北区内山下の話者 A の読み上げ調査では、通常の 1 単位形の他に一部で 2 単位形が観察された。岡山市の調査では同じリストを正順、逆順、正順、逆順で計 4 回読んでいただいたので、1 つの複合動詞は時間を置いて 4 回読む機会があり、6 名の話者で延べ 24 回となる。各話者の 2 単位形のデータは次のようになった。

先ずは実際の発音例を列挙する。話者 C は 起[こ]り[得]る 3 回 (以下「回」を省略)、[食]い飽[き]る 1、[攻]め寄[せる] 1、[食]べ付[ける] 1、ね[が]い[出]る 1、[跳]ね起[き]る 2、[撥]ね退[ける] 1、[ぶ]ち開[ける] 1、踏[み]抜[く] 1、[有]りあ[まる] 2、[有]りあ[まる] 2、生[か]し切[る] 2、生[か]し切[る] 1、お[も]い込[む] 3、切[り]は[な]す 1、[切]りは[な]す 1、く[さ]り切[る] 3、[捏]ねまわす 2、こ[ま]り切[る] 4、咲[き]掛[かる] 1、咲[き]掛[かる] 1、死[に]い[そ]ぐ 1、死[に]い[そ]ぐ 1、し[の]び込[む] 1、じゅ[く]し切[る] 3、じゅ[く]し切[る] 1、好[き]こ[の]む 3、[好]きこ[の]む 1、[住]み替[わる] 2、泣[き]く[る]う 1、名[乗]り合[う] 2、[降]り掛[かる] 1、ま[か]せ切[る] 2、ま[か]せ切[る] 1、[撒]き散[らす] 1、ま[も]り抜[く] 1、揺[れ]う[ご]く 3、よ[わ]り切[る] 3。——話者 D は [食]い飽[き]る 1、[跳]ね起[き]る 3、[ぶ]ち当[てる] 1、[有]りあ[まる] 2、お[も]い込[む] 1、く[わ]え込[む] 1、[好]きこ[の]む 4、そ[ひ]え立[つ] 1、た[お]れ込[む] 1、[食]べお[わる] 1、泣[き]く[る]う 1、ま[ぎ]れ込[む] 1、揺[れ]う[ご]く 2、よ[わ]り切[る] 1。——話者 E は 食[い]飽[き]る 1、[有]りあ[まる] 2、[好]きこ[の]む 1、ま[よ]い込[む] 1、揺[れ]う[ご]く 1。——話者 F は [打]ち明[ける] 1、起[こ]り[得]る 1、[折]り曲[げる] 2、[食]い飽[き]る 3、詰[め]替[える] 1、出[来]掛[ける] 1、取[り]立[てる] 2、ぶ[ち]撒[ける] 1、[見]当[たる] 2、[起]き上[がる] 1、[組]み合[わす] 1、[繰]り上[がる] 1、[差]しせ[まる] 1、[好]きこ[の]む 1、泣[き]く[る]う 1、引[き]千[切る] 1、ま[か]せ切[る] 1、揺[れ]う[ご]く 2、よ[わ]り切[る] 1。——話者 G は [生]き延[びる] 1、[打]ち明[ける] 1、起[こ]り[得]る 4、[織]り交[ぜ]る 1、[食]い飽[き]る 1、[跳]ね起[き]る 1、[あい]し合[う] 1、[有]りあ[まる] 4、押[し]た[お]す 1、く[さ]り切[る] 1、[捏]ねまわす 1、死[に]い[そ]ぐ 2、し[ぼ]り取[る] 1、

[好]きこ[の]む 1、そ[ひ]え[立]つ 4、た[ず]ね[合]う 1、た[た]き割[る] 1、は[な]し合[う] 1、は[な]し[合]う 1、ま[か]せ[切]る 3、[撒]き散[らす] 2、む[せ]び泣[く] 2、や[ぶ]り[取]る 1、揺[れ]う[ご]く 2、よ[わ]り[切]る 1、よ[わ]り切[る] 1。——話者 A は [吹]き[出]る 1、[編]み終[える] 1、[編]み終[える] 1、[折]り曲[げる] 1、[住]み替[える] 1、[出]来掛[け]る 1、[跳]ね起[き]る 1、跳[ね]起[き]る 1、[撥]ね退[ける] 1、引[き]締[め]る 1、[葺]き替[える] 1、[ぶ]ち開[ける] 1、[ぶ]ち当[てる] 2、[ぶ]ち撒[ける] 2、[編]み[出]す 3、[増]え[出]す 1、[ぶ]ち割[る] 1、[有]りあ[ま]る 2、聞[き]落[と]す 2、く[さ]り切[る] 1、く[わ]え込[む] 1、そ[ひ]え[立]つ 1、た[た]き割[る] 1、た[た]き割[る] 1、た[ど]り[着]く 1、泣[き]落[と]す 1、泣[き]く[る]う 1、飲[み]く[だ]す 1、[跳]ね飛[ば]す 1、振[り]し[ほ]る 1、む[せ]び泣[く] 1、む[せ]び泣[く] 1、揺[れ]う[ご]く 2、よ[わ]り切[る] 1。

話者 6 名の総和から 3 回以上（高々 24 回）観察された 2 単位形の語例は次のようになった。有り余る 14 回（以下「回」を省略）、揺れ動く 12、好き好む 11、起こり得る 8、跳ね起きる 8、弱り切る 8、食い飽きる 7、任せ切る 7、聳え立つ 6、腐り切る 5、思い込む 4、困り切る 4、死に急ぐ 4、熱し切る 4、泣き狂う 4、咽び泣く 4、折り曲げる 3、ぶち当てる 3、ぶち撒ける 3、編み出す 3、生かし切る 3、捏ね回す 3、叩き割る 3、撒き散らす 3。

データから、2 単位形が可能となる条件は「1. 前部要素と後部要素の意味が並列的であること」、「2. 後部要素が「切る、込む」のように前部要素の意味を強調するものであること」の 2 点が指摘できる。新田（2010）によれば石川県白峰方言の複合動詞は安定的に 2 単位形である（一部で 1 単位形も）。岡山市方言もそのような状況から出発したと考えるのが自然であるが、現在では 1 単位形が支配的である。1 単位形の中には、「[吹]き出す、拭[き]出す」のように前部要素にピッチの山が収まるもの（澤田（1990）要旨の用語で「前部アクセント」と呼ぶ）と、「吹[き]出す、拭[き]出す」のように前部要素にピッチの山が収まらず、複合動詞全体に渡るもの（澤田（1990）要旨の用語で「後部アクセント」と呼ぶ）とがある。山陽地方の古層においては後部アクセントが未発達で（都竹 1951）、前部アクセントの方が古いと言えるため、2 単位形が支配的な状況からは先ずは前部アクセントへと、続いて後部アクセントへと変化して行ったと考えられる。何故、そしてどのように前部アクセントへと変化したのだろうか。

下げ核を「<sub>1</sub>」で表わす。複合動詞の語構成は「連用形＋終止形」だから、アクセントも当初は「吹[き]出[す]、拭[き]出[す]」のようだったと考えられる（但しいわゆる高起式・低起式に相当する対立や、低起式の際の昇り核による上昇位置の対立は、本稿では考慮外とする）。なお平板型動詞連用形は「拭[き]」のように語末に核を有していたと考えられている（都竹 1951）。その点については 1 単位形を扱う 3.1.3 節で再び触れる。これが「吹[き]出す、拭[き]出す」へと変化する為には、第一に後部要素が起伏型である場合にはその核が喪失し、第二に後部要素の音調句（以下「句」と略す）が喪失して低平化する必要がある。岡山市方言の 2 単位形のデータを見ると分かるように、後部要素の核の有無は揺れており、「切る、込む」においては元が起伏型であるにもかかわらず無核の発音の方が多い。従って核の喪失と句の喪失の 2 段階に分けるのが妥当である。現象としては核と句の喪失だが、何故それが起こったのだろうか。

そもそも、上記の第 2 段階の低平化を「句の喪失」と捉えているが、この考え方は妥当だろ

うか。上野 (2009)「句頭の上昇は語用論的意味による」等によれば、句頭の上昇は、文における意味の切れ目と意味の焦点を表示する機能を有する事が、日本語アクセント論の共時的規則として措定されている。「上昇」が起こらなければ低平化するのは道理である。意味が句を規定すると言うが、それは意味が原因となって音調が決まるということである。岡山市方言で2単位形として残る条件に「1. 前部要素と後部要素の意味が並列的であること」を挙げたが、意味的に切れ目が存在するなら句は別々でいい。もし意味の切れ目が明確でないなら、そのこと自体が句を1つにしようとする圧力を生む。これを「複合動詞の前部アクセント化」の原因と見る。句を喪失する前段階として、句に含まれる核が先ずは剥がれ落ちることになる。また句頭の上昇は左側にあるので、前部要素の句がそのまま複合動詞の句としても残ることになる。

意味の切れ目が音調を決める他の現象として、4 モーラ畳語における2単位形(秋永 1980: 404-412)を挙げることができる。高山(2012: 19-20)では、岡山市方言において「動きや物事の繰り返し」を含意する際に2単位形が用いられることを示した(以下に一部引用する)。ここで「繰り返し」というのは、動きや物事の「切れ目が明瞭」ということでもある。

次に、話者 A1 回目・B・A2 回目・C・D・A3 回目の調査で「13」【＝「[ピ]カ[ピ]カと」のような音調で、2 モーラの構成要素が単独で単語となりうるか否かにかかわらず、これを2単位形と呼んだ】となった語の例文を、度数(高々6)と共に次に挙げる。【略】

次に情態副詞から挙げる。総数は情態副詞約 500 種中 138 種(話者 A1 回目 12 種、B 37 種、A2 回目 30 種、C 57 種、D 55 種、A3 回目 56 種)となった。先ず度数 6, 5, 4, 3のものを挙げる:「かあかあ鳴く、かあかあと」5(以下「かあかあと」に相当する部分を省略して記す)、「鋸でぎこぎこ切る」3、「こくこくと頷く」3、「ちびちび飲む」3、「ちよくちよく来る」5、「ちよびちよび飲む」4、「てくてく歩く」4、「にやあにやあ鳴く」4、「のしのし歩く」5、「のそのそ歩く」6、「馬がばかばかと走る」5、「ばかばか食う」3、「ひよこひよこ歩く」3、「ぴよこぴよこ歩く」3、「ほいほい引き受ける」4、「ほいほい捨てる」5、「ぼちぼちやってくる」6、「ぼちやぼちや泳ぐ」3、「ぼつぼつ降る」6、「ぼつぼつ出かけよう」4、「ぼとぼと落ちる」4、「ぼとぼと落ちる」3、「ぼりぼり噛む」3、「よちよち歩く」3、以上 24 種。続いて度数 2のものを挙げる:【略】、以上 36 種。【左記のものの大多数は、動きが繰り返しているという解釈の公算が高い】。【略】度数 1, 0のものは省略するが、動きの切れ目が必ずしも明瞭でないか存在しないものが多数含まれている。例えば度数 1 の「にこにこ笑う」は笑顔と無表情との繰り返しではなく、笑顔の継続を意味している。

話者 B【＝本稿の A】の内省報告によれば、「ぼこぼこ叩く」(方言形: ぼごぼご)は「13」だと叩くのがゆっくりで「核 2」【＝「[ピ]カ[ピ]カと」のような音調で、こちらは1単位形に当たる】だと速い。また「ぼつぼつ降る」は「13」だと降るのが少量で「核 2」だと多量である。【略】話者 A (3 回目)【＝本稿の D】の内省報告を列挙する:【略】「ほそほそ暮らす」は「13」なら余裕がある、「核 3」ならきゅうきゅうしている。「ひよこひよこ、ぴよこぴよこ、ふうふう、ぷうぷう、ぼくぼく、ぼこぼこ、ほそほそ、ぼたぼた、

ぼちぼち、ぼちゃぼちゃ、ぼつぼつ、ぼつぼつ、ぼとぼと、ぼとぼと、ぼりぼり、ぼろぼろ」は「13」ならゆっくり、「核2」なら速く。「ぶうぶう、ふりふり、ぼりぼり、もじもじ」は「13」ならゆっくり、「核2」なら激しく。「ぶちぶち、ぽかぽか（と殴る）、ぼたぼた、みしみし」は「13」ならゆっくり別々に、「核2」なら速く続けて。「そろそろ（帰ろう）」は「13」ならゆっくり、「核2」ならもういい加減に。「ひりひり、びりびり、ぽかぽか（する）」は「13」ならじんわり、「核2」なら強烈に。「びしびし・びしびし（叱る）」は「13」なら柔かくじっくり、「核2」なら沢山。「ぼそぼそ（した米）」は「13」なら普通に、「核2」なら余計にばらばら。【このように度数・内省の両面から分析を実施している。】

### 3. 岡山市方言などの複合動詞の1単位形アクセント

上述のように、話者 A, C, D, E, F, G からは一部の語彙で2単位形アクセントが観察されているが、それらは表1（後述）では「前部アクセント」に準ずる例として、1つ目のピッチの山に存在する核の位置をデータとした。言わば「非後部アクセント」という括りである。

複合動詞のアクセントをその前部要素のアクセントから共時的に予測しようとした時に、データから見る限り完全な予測は不可能であり、出来ることは「典型的」なものを指定した上でそこからの「ずれ」を測ることである。この「ずれ」は地点や個人によって異なる。このとき指定する「典型的」な形として、前述の前部アクセントと後部アクセントを考える。前部アクセントは通時的には前部要素（連用形）のアクセントをそのまま反映したものであり、例えば「[吹]き出す、拭[き]出す、[見]澄ます、[寝]転がる」などとなる。後部アクセントは複合動詞全体として次末核型または無核型であり、例えば「吹[き出す、拭[き出す]」などとなる。なお「[見]澄ます、寝[こ]ろがる」のような「典型的な例外」が存在するが、これは集計では「後部アクセント」に準ずる例として処理した。言わば「非前部アクセント」という括りである。

以上を踏まえ、次ページから表1、続いて表2を示す。表1は既に述べたように、話者 A から G の読み上げ調査のデータの一部（433 語中冒頭 80 語）を掲載するものである（433 語のリストだけなら後述の表3を参照すれば分かる）。紙幅の都合で本稿では一部のみの掲載となり、全データの掲載は別稿に期することになる。なお、本稿の議論を理解する上で表1の数字を細かく読む必要はなく、様子が掴めればよい。また、表2はその「全データ」を分析し、前部要素の型と前部・後部要素のモーラ数に応じた、複合動詞の核の有無と位置の、度数と割合を示したものである。

表2で「前部中」（例；[吹]き出す、う[こ]き出す）と「境界」（例；拭[き]出す、さ[がし]出す）と「前部中＝境界」（例；[見]澄ます、[寝]転がる）は「前部アクセント」であり、「後部中」（例；吹[き出]す、拭[き出]す、見[澄]ます、寝[こ]ろがる、見[澄ま]す、寝[転が]る）と「なし」（例；吹[き出す、見[澄ます]）は「後部アクセント」である。但し「見[澄]ます、寝[こ]ろがる」のタイプは一定数ながら少数であり、表2で算出した割合にはほとんど影響が無い。

表2に続き、先ずは表2全体に共通して見られる特徴と各話者に固有の特徴とを指摘し、続いて変化の現象と原因、更には条件と順序を考察する。

表 1. 岡山市方言および尾道市方言における複合動詞のアクセント資料 (80/433 語掲載)

番号	前拍	全拍	かな	漢字	A	A	A	A	B	B	C	C	C	C	D	D	D	D	E	E	E	E	F	F	F	F	G	G	G	G			
1	2	4			前	正	逆	正	前	正	前	正	逆	正	前	正	逆	正	前	正	逆	正	前	正	逆	正	前	正	逆	正			
1	2	4	あり・える	有り・得る	1	3	3	3	1	3	3	3	3	1	3	3	3	3	1	3	3	3	3	1	3	3	3	1	3	3	3		
2	1	4	い・あてる	射・当てる	1	1	3	1	3	1	0	0	1	1	1	1	1	3	0	3	3	3	0	1	1	1	1	1	0	1	3		
3	1	4	い・すぎる	屋・過ぎる	0	3	1	3	1	3	0	3	3	0	0	1	1	3	0	3	3	3	0	1	1	1	0	1	3	3	3		
4	1	4	い・とめる	射・止める	1	3	3	3	1	3	1	3	3	3	1	3	1	1	3	3	3	3	1	2	1	1	1	1	3	1	1		
5	2	4	うき・でる	浮き・出る	0	2	2	2	3	0	2	0	2	2	2	0	2	2	2	0	2	2	2	2	0	2	2	2	0	2	1	2	
6	1	4	き・がえる	肴・替える	0	3	3	3	3	0	3	0	3	3	3	0	3	3	3	3	0	3	3	3	3	0	3	3	3	0	3	3	
7	1	4	き・つける	肴・付ける	0	3	3	3	3	0	3	0	3	0	3	0	3	3	0	3	3	3	3	0	3	3	1	3	0	3	3	3	
8	1	4	し・あげる	仕・上げる	0	3	3	3	3	0	3	0	3	0	3	0	1	3	3	3	3	3	3	0	3	3	1	0	1	3	1	3	
9	1	4	し・いれる	仕・入れる	0	3	3	3	3	0	3	0	3	0	3	0	3	3	3	3	3	3	3	0	3	3	3	3	0	3	3	3	
10	1	4	し・かえる	仕・替える	0	3	3	1	0	3	0	3	3	3	3	0	3	3	3	3	3	3	3	0	3	3	1	0	1	3	1	1	
11	1	4	し・かける	仕・掛ける	0	1	3	3	3	0	3	0	3	3	3	3	0	3	3	3	3	3	3	0	3	1	3	1	0	1	3	1	
12	1	4	し・たてる	仕・立てる	0	3	3	3	1	0	3	0	3	3	3	3	0	3	3	3	3	3	3	0	3	3	3	1	0	3	3	3	
13	1	4	し・つける	仕・付ける	0	3	3	3	1	0	3	0	3	0	3	0	3	1	1	3	3	3	3	0	3	3	3	1	0	3	3	3	
14	1	4	し・むける	仕・向ける	0	3	3	3	3	0	3	0	3	3	3	3	0	3	3	3	3	3	3	0	1	1	1	0	3	3	3	3	
15	1	4	し・わける	仕・分ける	0	1	3	1	3	0	3	0	3	0	3	0	3	3	3	3	3	3	3	0	3	0	3	1	0	3	3	3	
16	2	4	つき・でる	突き・出る	0	2	2	3	2	0	2	0	2	2	2	2	0	2	2	2	2	0	2	2	2	2	0	2	1	2	2	0	
17	1	4	で・かける	出・掛ける	1	1	0	0	0	1	0	1	0	0	0	1	1	0	0	1	3	3	3	1	1	1	1	1	3	0	0	0	
18	1	4	で・すぎる	出・過ぎる	1	3	0	3	0	1	3	1	0	0	0	1	1	3	0	1	3	3	3	1	0	0	1	1	3	3	0	1	
19	1	4	に・しめる	煮・染める	0	1	3	3	3	0	0	0	3	0	0	0	3	3	3	3	3	3	3	0	1	0	1	2	0	3	3	3	
20	1	4	に・たてる	煮・立てる	0	3	3	3	3	0	3	0	3	3	3	0	3	1	3	3	3	3	3	0	3	3	1	0	3	3	1	3	
21	1	4	に・つける	煮・付ける	0	3	3	3	1	0	3	0	0	0	0	0	3	3	3	3	3	3	3	0	1	3	1	0	3	3	3	3	
22	1	4	に・つめる	煮・詰める	0	3	3	1	0	3	0	3	0	3	1	0	3	3	1	1	0	3	3	3	0	1	1	1	0	1	1	3	
23	2	4	ぬけ・でる	抜く・出る	0	2	2	2	2	0	2	0	2	2	2	2	0	2	2	2	2	0	2	2	2	2	0	2	2	2	2	2	
24	1	4	ね・すぎる	寝・過ぎる	0	1	3	3	3	0	3	0	3	0	3	0	1	1	2	0	3	3	3	3	0	1	1	1	0	1	1	3	
25	1	4	ね・ぼける	寝・ぼける	0	3	3	3	3	0	3	0	3	3	3	0	3	3	3	3	3	3	3	0	3	3	3	3	0	3	3	3	
26	2	4	はい・でる	遣い・出る	1	1	1	1	1	1	1	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
27	2	4	はみ・でる	食み・出る	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
28	1	4	ひ・われる	干・割れる	1	1	1	1	3	1	0	3	3	3	1	3	3	1	3	1	3	3	3	1	3	0	3	0	3	0	3	3	
29	2	4	ふき・でる	吹き・出る	1	3	1	3	1	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
30	1	4	み・あきる	見・飽きる	1	0	0	3	1	3	1	0	1	0	0	1	1	1	1	1	3	3	3	1	1	2	1	1	0	0	0	0	
31	1	4	み・あげる	見・上げる	1	3	3	0	1	0	1	0	0	0	1	1	1	1	1	1	3	3	3	1	1	1	1	1	0	0	0	1	
32	1	4	み・かける	見・掛ける	1	1	0	0	1	3	1	0	0	0	1	0	0	0	1	3	3	3	3	1	3	0	0	1	3	0	1	3	
33	1	4	み・かねる	見・推ねる	1	3	3	3	1	0	1	0	0	0	1	0	1	3	0	1	3	3	3	1	2	1	1	1	3	1	1	1	
34	1	4	み・さげる	見・下げる	1	3	0	1	3	1	0	1	0	0	0	1	3	0	3	1	3	3	3	1	1	0	1	1	0	0	3	0	
35	1	4	み・すてる	見・捨てる	1	3	0	0	1	0	1	0	0	0	1	0	0	0	1	3	3	3	3	1	1	0	0	1	0	0	0	0	
36	1	4	み・つける	見・付ける	1	0	0	1	0	1	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	3	3	3	1	1	1	0	1	0	1	3	3	
37	1	4	み・つめる	見・詰める	1	3	0	1	3	1	0	1	0	1	3	1	1	1	1	1	3	3	3	1	1	0	1	0	1	3	1	1	
38	1	4	み・なれる	見・慣れる	1	1	3	3	0	1	3	1	0	0	1	1	3	3	0	1	3	3	3	1	3	1	0	1	1	1	3	3	
39	1	4	み・わける	見・分ける	1	3	3	0	1	3	1	0	0	0	1	1	0	0	1	3	0	3	3	1	1	3	0	0	1	3	3	0	
40	2	4	わき・でる	湧き・出る	0	2	2	2	2	0	2	0	2	2	2	2	0	2	2	2	2	0	2	2	2	3	0	2	2	2	2	2	
41	2	5	あげ・かける	上げ・掛ける	0	2	2	2	2	0	2	0	2	2	2	2	0	2	2	2	2	2	0	2	2	2	2	0	2	2	2	2	
42	2	5	あて・はめる	当て・嵌める	0	2	2	2	2	0	2	0	2	2	2	2	0	2	2	2	2	2	0	2	2	2	2	0	2	2	2	2	
43	2	5	あみ・おえる	編み・終える	1	1	1	1	1	1	1	0	0	0	1	0	0	0	1	4	4	4	1	1	2	0	0	1	1	0	0	0	
44	2	5	あり・すぎる	有り・過ぎる	1	4	1	1	0	1	4	0	0	0	1	1	0	0	0	1	4	4	4	1	0	0	2	0	1	1	0	2	0
45	1	5	い・あわせる	居・合わせる	0	1	1	4	1	1	4	0	0	0	0	0	1	1	1	4	0	4	4	4	0	1	0	4	0	4	1	4	4
46	2	5	い・あてる	言い・当てる	0	2	4	2	4	0	2	0	2	2	2	0	2	2	2	2	0	2	4	2	0	2	2	2	0	2	2	2	
47	2	5	い・かえる	言い・換える	0	2	2	2	2	0	2	0	2	2	2	0	2	2	2	2	0	2	2	2	0	2	2	2	0	2	2	2	2
48	2	5	い・すぎる	言い・過ぎる	0	2	2	2	2	4	0	2	0	0	0	2	2	2	2	0	2	4	4	4	4	0	2	2	2	0	2	2	2
49	2	5	いき・のびる	生き・延びる	1	4	4	0	1	4	1	0	0	0	1	0	0	0	1	4	4	4	4	1	0	0	0	0	1	2	0	0	
50	2	5	いれ・かえる	入れ・替える	0	4	4	2	4	0	2	0	2	2	2	0	2	2	2	2	0	2	2	2	2	0	2	2	0	2	2	2	2
51	2	5	いれ・すぎる	入れ・過ぎる	0	4	2	2	2	0	4	0	2	2	2	0	2	2	2	2	0	4	4	2	0	2	2	2	0	0	4	2	2
52	2	5	うえ・つける	植え・付ける	0	2	2	2	2	0	4	0	2	2	0	2	2	2	2	0	2	2	4	2	0	2	2	2	0	2	2	2	2
53	2	5	うけ・いれる	受け・入れる	1	4	0	0	1	0	1	0	0	0	1	0	0	0	1	0	4	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
54	2	5	うけ・つける	受け・付ける	1	4	0	4	0	1	4	1	0	0	0	1	0	0	0	1	0	4	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0
55	2	5	うけ・とめる	受け・止める	1	4	0	4	1	0	1	0	0	0	1	0	0	0	1	0	4	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
56	2	5	うち・あげる	打ち・明ける	1	4	4	0	4	0	1	0	1	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	1	1	0	0	0
57	2	5	うち・こめる	打ち・込める	1	4	1	0	4	1	4	1	0	0	0	1	0</																

表 2.a. 複合動詞の核の有無と位置のデータの分析 (A ; 岡山県岡山市北区内山下 1949-)

要 点	前部要素の型 とモーラ(m)数	後部要素 の m 数	複合動詞の核の有無と位置				合 計
			前部中	境界	後部中	なし	
分 布 状 況	平板型 1m	任意	49 (34%)		95 (66%)	0	144
	起伏型 1m		74 (22%)		154 (45%)	116 (34%)	344
	平板型 2, 3m		7 (1%)	411 (72%)	142 (25%)	8 (1%)	568
	起伏型 2, 3m		318 (47%)	34 (5%)	199 (29%)	125 (18%)	676
前 部 m 数	平板型 2m	任意	4 (1%)	383 (71%)	142 (26%)	7 (1%)	536
	平板型 3m		3 (9%)	28 (88%)	0	1 (3%)	32
	起伏型 2m		182 (34%)	31 (6%)	193 (37%)	122 (23%)	528
	起伏型 3m		136 (92%)	3 (2%)	6 (4%)	3 (2%)	148
後 部 m 数	平板型 2m	2m	2 (1%)	176 (71%)	68 (27%)	2 (1%)	248
		3m	2 (1%)	207 (72%)	74 (26%)	5 (2%)	288
	起伏型 2m	2m	70 (55%)	10 (8%)	41 (32%)	7 (5%)	128
		3m	112 (28%)	21 (5%)	152 (38%)	115 (29%)	400

表 2.b. 複合動詞の核の有無と位置のデータの分析 (B ; 広島県尾道市西久保町 1936-)

要 点	前部要素の型 とモーラ(m)数	後部要素 の m 数	複合動詞の核の有無と位置				合 計
			前部中	境界	後部中	なし	
分 布 状 況	平板型 1m	任意	3 (9%)		29 (88%)	1 (3%)	33
	起伏型 1m		2 (2%)		45 (51%)	42 (47%)	89
	平板型 2, 3m		3 (2%)	90 (62%)	47 (32%)	5 (3%)	145
	起伏型 2, 3m		63 (36%)	7 (4%)	66 (38%)	37 (21%)	173
前 部 m 数	平板型 2m	任意	0	84 (62%)	47 (35%)	5 (4%)	136
	平板型 3m		3 (33%)	6 (67%)	0	0	9
	起伏型 2m		36 (26%)	5 (4%)	58 (43%)	37 (27%)	136
	起伏型 3m		27 (73%)	2 (5%)	8 (22%)	0	37
後 部 m 数	平板型 2m	2m	0	48 (75%)	14 (22%)	2 (3%)	64
		3m	0	36 (50%)	33 (46%)	3 (4%)	72
	起伏型 2m	2m	21 (64%)	0	7 (21%)	5 (15%)	33
		3m	15 (15%)	5 (5%)	51 (50%)	32 (31%)	103

表 2.c. 複合動詞の核の有無と位置のデータの分析 (C ; 岡山県岡山市南区妹尾 1932-)

要 点	前部要素の型 とモーラ(m)数	後部要素 の m 数	複合動詞の核の有無と位置				合 計
			前部中	境界	後部中	なし	
分 布 状 況	平板型 1m	任意	23 (16%)		78 (54%)	43 (30%)	144
	起伏型 1m		53 (15%)		59 (17%)	232 (67%)	344
	平板型 2, 3m		5 (1%)	471 (83%)	24 (4%)	68 (12%)	568
	起伏型 2, 3m		273 (40%)	27 (4%)	17 (3%)	359 (53%)	676
前 部 m 数	平板型 2m	任意	0	444 (83%)	24 (4%)	68 (13%)	536
	平板型 3m		5 (16%)	27 (84%)	0	0	32
	起伏型 2m		133 (25%)	27 (5%)	13 (2%)	355 (67%)	528
	起伏型 3m		140 (95%)	0	4 (3%)	4 (3%)	148
後 部 m 数	平板型 2m	2m	0	196 (79%)	19 (8%)	33 (13%)	248
		3m	0	248 (86%)	5 (2%)	35 (12%)	288
	起伏型 2m	2m	63 (49%)	1 (1%)	9 (7%)	55 (43%)	128
		3m	70 (18%)	26 (7%)	4 (1%)	300 (75%)	400



表 2.d. 複合動詞の核の有無と位置のデータの分析 (D: 岡山県岡山市南区妹尾 1937-)

要 点	前部要素の型 とモーラ(m)数	後部要素 の m 数	複合動詞の核の有無と位置				合 計
			前部中	境界	後部中	なし	
分 布 状 況	平板型 1m	任意	47 (33%)		93 (65%)	4 (3%)	144
	起伏型 1m		141 (41%)		57 (17%)	146 (42%)	344
	平板型 2, 3m		6 (1%)	518 (91%)	21 (4%)	23 (4%)	568
	起伏型 2, 3m		341 (50%)	5 (1%)	22 (3%)	308 (46%)	676
前 部 m 数	平板型 2m	任意	2 (0%)	490 (91%)	21 (4%)	23 (4%)	536
	平板型 3m		4 (13%)	28 (88%)	0	0	32
	起伏型 2m		202 (38%)	5 (1%)	17 (3%)	304 (58%)	528
	起伏型 3m		139 (94%)	0	5 (3%)	4 (3%)	148
後 部 m 数	平板型 2m	2m	1 (0%)	233 (94%)	7 (3%)	7 (3%)	248
		3m	1 (0%)	257 (89%)	14 (5%)	16 (6%)	288
	起伏型 2m	2m	69 (54%)	3 (2%)	4 (3%)	52 (41%)	128
		3m	133 (33%)	2 (1%)	13 (3%)	252 (63%)	400

表 2.e. 複合動詞の核の有無と位置のデータの分析 (E: 岡山県岡山市南区妹尾 1943-)

要 点	前部要素の型 とモーラ(m)数	後部要素 の m 数	複合動詞の核の有無と位置				合 計
			前部中	境界	後部中	なし	
分 布 状 況	平板型 1m	任意	1 (1%)		139 (94%)	8 (5%)	148
	起伏型 1m		10 (3%)		233 (69%)	97 (29%)	340
	平板型 2, 3m		15 (3%)	260 (45%)	267 (46%)	38 (7%)	580
	起伏型 2, 3m		216 (33%)	26 (4%)	233 (35%)	189 (28%)	664
前 部 m 数	平板型 2m	任意	9 (2%)	238 (43%)	264 (48%)	37 (7%)	548
	平板型 3m		6 (19%)	22 (69%)	3 (9%)	1 (3%)	32
	起伏型 2m		83 (16%)	25 (5%)	220 (43%)	188 (36%)	516
	起伏型 3m		133 (90%)	1 (1%)	13 (9%)	1 (1%)	148
後 部 m 数	平板型 2m	2m	7 (3%)	94 (37%)	144 (56%)	11 (4%)	256
		3m	2 (1%)	144 (49%)	120 (41%)	26 (9%)	292
	起伏型 2m	2m	36 (30%)	7 (6%)	68 (57%)	9 (8%)	120
		3m	47 (12%)	18 (5%)	152 (38%)	179 (45%)	396

表 2.f. 複合動詞の核の有無と位置のデータの分析 (F: 岡山県岡山市南区妹尾 1927-)

要 点	前部要素の型 とモーラ(m)数	後部要素 の m 数	複合動詞の核の有無と位置				合 計
			前部中	境界	後部中	なし	
分 布 状 況	平板型 1m	任意	70 (47%)		58 (39%)	20 (14%)	148
	起伏型 1m		118 (35%)		73 (21%)	149 (44%)	340
	平板型 2, 3m		2 (0%)	522 (92%)	6 (1%)	38 (7%)	568
	起伏型 2, 3m		395 (58%)	42 (6%)	18 (3%)	221 (33%)	676
前 部 m 数	平板型 2m	任意	2 (0%)	491 (92%)	6 (1%)	37 (7%)	536
	平板型 3m		0	31 (97%)	0	1 (3%)	32
	起伏型 2m		255 (48%)	41 (8%)	15 (3%)	217 (41%)	528
	起伏型 3m		140 (95%)	1 (1%)	3 (2%)	4 (3%)	148
後 部 m 数	平板型 2m	2m	2 (1%)	217 (88%)	5 (2%)	24 (10%)	248
		3m	0	274 (95%)	4 (1%)	13 (5%)	288
	起伏型 2m	2m	83 (65%)	5 (4%)	5 (4%)	35 (27%)	128
		3m	172 (43%)	36 (9%)	10 (3%)	182 (46%)	400

表 2.g. 複合動詞の核の有無と位置のデータの分析 (G: 岡山県岡山市南区妹尾 1932-)

要 点	前部要素の型 とモーラ(m)数	後部要素 の m 数	複合動詞の核の有無と位置				合 計
			前部中	境界	後部中	なし	
分 布 状 況	平板型 1m	任意	50 (34%)		95 (64%)	3 (2%)	148
	起伏型 1m		78 (23%)		96 (28%)	166 (49%)	340
	平板型 2, 3m		14 (2%)	503 (88%)	23 (4%)	33 (6%)	572
	起伏型 2, 3m		276 (41%)	96 (14%)	26 (4%)	274 (41%)	676
前 部 m 数	平板型 2m	任意	6 (1%)	476 (89%)	22 (4%)	32 (6%)	536
	平板型 3m		8 (22%)	27 (75%)	1 (3%)	1 (3%)	36
	起伏型 2m		158 (30%)	78 (15%)	20 (4%)	272 (52%)	528
	起伏型 3m		118 (82%)	18 (13%)	6 (4%)	2 (1%)	144
後 部 m 数	平板型 2m	2m	5 (2%)	219 (88%)	13 (5%)	11 (4%)	248
		3m	1 (0%)	257 (89%)	9 (3%)	21 (7%)	288
	起伏型 2m	2m	57 (45%)	24 (19%)	9 (7%)	38 (30%)	128
		3m	101 (25%)	54 (14%)	11 (3%)	234 (59%)	400

## 3.1. 岡山市方言などの複合動詞の 1 単位形アクセントのデータの分析と解釈

## 3.1.1. 表 2 全体に共通して見られる特徴と各話者に固有の特徴

表 2 の「分布状況」を見ると「前部中」型と「境界」型がほぼ完全に相補分布に従っており、前部アクセントは通時的には連用形のアクセントを反映しているとする考え方が妥当であると分かる。但し前部要素が起伏型の場合で「境界」型をとるケースは話者によっては少数ながら一定数ある。他方で、「後部中」型と「なし」型は相補分布とまでは行かない。但し話者 D のデータを見ると、前部要素が 1 モーラの場合には相補分布に近いものが成立しており、東京方言の「山田の法則」<sup>3</sup> (核保存の逆転) の成立の可能性を窺わせる。一般的には前部要素が 1 モーラで平板型の場合に、「なし」型になることはほとんどない (よって後部アクセントをとるならば必然的に「後部中」型になる) という点が非常に強い傾向として存在しており、同じことは前部要素が 2, 3 モーラで平板型の場合についても言える。他方で、前部要素が 1 モーラで起伏型の場合に、「後部中」型になることは普通にあり、話者 D でさえ少数ながら一定数ある (その割合が更に少しだけ増えているのが話者 G のデータである)。

前部要素が起伏型の場合で「なし」型になる現象は、話者 A, B ではやや進行している程度だが、話者 C, D, E, F, G では前部要素が 2, 3 モーラの語にまで大いに進行している。話者 C, F に至っては勢い余って、前部要素が平板型の場合でも「なし」型になるケースが少数ながら一定数ある (これさえ無ければ、話者 C, F もまた話者 D のデータに近づく)。これらのことは通時的には「無核化」が前部要素 1 モーラの起伏型から始まって前部要素 2, 3 モーラの起伏型へと波及していると解釈される。「無核化」は原則として前部要素が起伏型のものにだけ起こる。

前部要素が 2, 3 モーラの場合で「後部中」型になる現象は、話者 A, B, E では大いに進行して

<sup>3</sup> 都竹 (1951: 397) に「東京アクセントには、山田美妙が発見した「複合動詞のアクセントの式は、前の要素の式の反対になる。」といふ有名な法則がある」とある。ここでいう「式」は古い用語で、平板型・起伏型を当時は平板式・起伏式と呼んだ。平板型・起伏型は無核・有核なので、核の有無の逆転とも見ることができる。

いるが、話者 C, D, F, G では萌芽的である。これらのことは通時的には「次末核化」が前部要素 1 モーラの場合から始まって前部要素 2, 3 モーラの場合へと波及していると解釈される。「次末核化」は、前部要素が平板型であろうと起伏型であろうと起こっている。

前部アクセントと後部アクセントのバランスを見ると、前部要素が 2, 3 モーラの場合にはどの話者も多かれ少なかれ前部アクセントを保っているのに対して、前部要素が 1 モーラの場合には話者 B, E は前部アクセントをほとんど失っており、話者 A, C, D, F, G が比較的強く保っているのと対照的である。また、前部要素が 2, 3 モーラの場合についても話者によっては割合が下がってきている。これらのことは通時的には「後部アクセント化」が前部要素 1 モーラの場合から始まって前部要素 2, 3 モーラの場合へと波及していると解釈される。

次に表 2 の「前部 m 数」を見ると、前部要素が 3 モーラの場合には後部アクセントは萌芽的であり、ほとんどが前部アクセントで実現しているが、他方で前部要素が 2 モーラの場合には後部アクセントが比較的発達している。また表 2 の「後部 m 数」を見ると、前部要素が 2 モーラの場合に、後部要素が 2 モーラより 3 モーラの方が後部アクセントをとりやすいという傾向が、多かれ少なかれ全話者に認められる。これらのことは通時的には「後部アクセント化」が、複合動詞全体に占める前部要素の比重が軽いものから順に起こっていると解釈される。

### 3.1.2. 前部アクセントから後部アクセントへの変化の現象と原因

前部アクセントから後部アクセントへの移行は、現象としては「無核化」と「次末核化」の 2 種類の変化に分けることが出来る。これらの変化によって、複合動詞は 2 型化することになる。複合動詞の 2 型化の原因として、純然たる音声変化の可能性はほとんど考えられない。前部要素が起伏型である複合動詞の前部要素中にある「核」が突然消滅して平板化するという現象を純然たる音声変化とは考えられないし、同じことがモーラ数の多い語の次末核化についても言える。従って類推変化の可能性が残される。次に「体系内の多数派のパターンへの合流」の可能性だが、東京方言の名詞などでそのような現象が起こっていることが秋永 (2002: 52-56) などで指摘されている。しかし動詞においては基本的な 2 型のうちのいずれかが多数派であったという状況は考えにくい。他方で現代の東京では無核型複合動詞の次末核型化がモーラ数の多い語から順に進行しているが、これは一旦アクセントが 2 型化した上で更に 1 型化が進行しているということであり、動詞の 2 型化とはまた別の現象であって、本稿では扱わない。

2 節で、2 単位形アクセントから前部アクセントへの変化は「後部要素の核と句の喪失」と捉え、その原因を「意味の切れ目が存在しないせいで 2 つの句が 1 つになろうとした」為であると説明した<sup>4</sup>。ここではその続きを説く。前部アクセントにおける句というのは、複合動詞の句であると同時に、今なお前部要素の句でもあり、「二重の解釈」を有していると考えられる。さて、例えば話者 A のような比較的若い世代では前部アクセントが後部アクセントよりも「表出的 (expressive)」な傾向をもつが (4 節参照)、これは東京で前部アクセントのまま残っている

<sup>4</sup> 再掲する：上野 (2009)「句頭の上昇は語用論的意味による」等によれば、句頭の上昇は、文における意味の切れ目と意味の焦点を表示する機能を有する事が、日本語アクセント論の共時的規則として指定されている。

複合動詞の意味についても同じことが確認できる<sup>5</sup>。『新明解日本語アクセント辞典』p.(54)「アクセント習得法則」45より以下に引用する。これは秋永（2002: 52）にも同様の記述がある。

注意② 但し、強めの意をもつ結合動詞は、前部動詞のアクセントを生かす傾向がある。

[モ'レキク（漏れ聞く）	タ[タ'キツケル（叩き付ける）
[コ'キツカウ（扱き使う）	ヒ[キズ'リダス（引摺り出す）
オ[ソ'レイル（恐れ入る）	ヒ[ツ'パ'リマウス（引っ張り回す）
カ[ジ'リツク（齧り付く）	

これら前部動詞のアクセントを残す型は、古くはごく一般的なアクセントで、高年層では個人により今でもごくふつうに使われるが、中・若年層では強めの時にのみ使われることが多い。そこで本文ではそれぞれ《強は…》と記しておいた。

これらのように、意味的に焦点があるなら前部要素に句を局在させていい。もし意味の焦点が無いなら、そのこと自体が句を脱局在化（＝アクセントの面でも焦点を無くすこと）させようとする圧力を生む。これを「複合動詞の後部アクセント化」の原因と見る。前部要素に局在する句を脱局在化させる方法としては、句に含まれる核を失って全体を平板化させるのが手取り早い（無核化）。また、句の「二重の解釈」をやめて複合動詞の句としか解釈できないように核の位置を右にずらすということもできる（次末核化）。要するに、ここでは前部アクセントから後部アクセントへの変化を「前部要素の核と句の喪失」と捉え、その原因を「意味の焦点が存在しないせいで前部要素に局在する句が引き伸ばされようとした」為であると説明する。

### 3.1.3. 前部アクセントから後部アクセントへの変化の条件と順序

前部要素が平板型のものはモーラ数にかかわらず、原則として「無核化」を起こさないということが表2から分かっている。結論から言えば、これは「複合動詞の内部境界に存在する核は共時的には前部要素の核ではない」からであると考えられる。前部アクセントから後部アクセントへの変化は「前部要素の核と句の喪失」なので、初めから前部要素の核ではなく、複合動詞の核でしかないなら、喪失することはできないという理屈になる。

2 節で「再び触れる」と書いていた、平板型動詞連用形の語末核についてここで説明する。平板型動詞連用形の語末核は、「て」「た」「たり」に続く形（音便形が発生する環境）においても一部の方言（東京都青梅町、千葉県館山市北条を含む）には残っている事が都竹（1951）に指摘されている（例：ア[テ]タ、ア[ケ]テ）。岡山市の話者 K, N は「ハ[ジメ]テ（副詞）」と発音するが、これは痕跡的な発音の可能性がある。ところが、音便形が発生する環境において真っ先にこの語末核は失われた。現代の東京で連用形末尾に下がり目を有するのは「聞き'さえ」「聞き'も」「聞き'こそ」「聞き'は」「聞き'など」のような副助詞で、下がり目を有しないのは「聞

<sup>5</sup> 同様の現象は、筆者がその後調査した東京都東村山市にも見られたので、4 節の脚注 8 で簡単に説明する。なお「表出的（expressive）」というのは、「音韻的な有標性に基づく意味の強調」を表わす用語である。

きに「聞いて」「聞いては」「聞いたり」「聞いた」「聞きながら」「聞きそうな」「聞きま  
す」「聞きなさい」であるが、例えば岡山市では話者 A, H によれば「聞き'に行く」「聞き'なが  
ら」「聞きよ'ーる」となり、連用形末尾に下がり目を有する環境が東京より少しだけ広い<sup>6</sup>。通  
時的には先ずは音便形が発生する環境から語末核が失われ始め、やがて東京のような状況に至  
ったと考えられるが、連用形にとっての中心的な、使用頻度の高い、言わば基本形は「て」「た」  
「たり」に続く形であり、その他の形は副次的な、使用頻度の低い、言わば特殊形と見なされ  
る。特殊形でいくら語末核を保てようと、基本形が無核である限り、使用頻度で見れば総  
合的には無核であり、語末核を保つ環境が減少して行けば、そのような意識にはますます拍車  
が掛かる。かくして、共時的には最早無核となった平板型連用形から見れば、複合動詞の内部  
境界に存在する核は「予期せぬ核」であり、「前部要素の核ではなく、複合動詞の核でしかない」  
ということになる。これが複合動詞の「無核化」に際して変化の条件（核保存の義務化）とし  
て働くと考えられる。また逆に考えれば、音便形が発生する環境においても語末核を有してい  
た過去の段階では、「予期せぬ核」を予測する複合規則を立てるまでもなく、動詞連用形のアク  
セントをそのまま共時的に反映して前部アクセントが成立していたということになる。

「無核化」と「次末核化」は、筆者の考えが及ぶ限りでは、どちらが先に起こらなければなら  
ないというものではない。2 節で考察した「2 単位形アクセントの前部アクセント化」では、  
核を喪失することなく句を喪失することは原理的に出来ないと考えられる。しかし「前部アク  
セントの後部アクセント化」では、核を保存したまま句を脱局在化させられるし、もちろん直  
ちに核を喪失することもできる。「無核化」と「次末核化」のどちらが先行するにせよ、「前部  
アクセント」という言わば資源のようなもの<sup>7</sup>を「無核化」と「次末核化」が食い潰して「後部  
アクセント」の山を築いていくのがこの変化の姿である。従って東京方言における「山田の法  
則」が成立する為には、「無核化」が著しく先行し、前部要素が起伏型である「前部アクセント」  
の資源を消費しきっておく必要がある。さもないと、「次末核化」に資源を奪われて、相補分布  
（核保存の逆転）が成立できないからだ。「山田の法則」に最も近い話者 D のデータでさえ、  
既に「次末核化」に資源を奪われ始めており、「山田の法則」の成立は危ういと思われる。

「無核化」も「次末核化」も、先ずは前部要素が 1 モーラのものから始まり、複合動詞全体  
に占める前部要素の比重が軽いものから順に伝染していることが表 2 のデータから分かっている。  
これは変化の動機が「前部要素への句の局在を解消せんがため」であるということと関係  
していると考えられる。即ち、最も局在しているものから順に変化し始めるというわけである。

東京方言の「山田の法則」と岡山市などの複合動詞のアクセントとを関連付けて議論してき  
たが、ここでそのことの妥当性について補足しておく。繰り返しになるが、平板型連用形の核  
は、「て」「た」に続く形においても一部の方言（東京都青梅町、千葉県館山市北条を含む）に

<sup>6</sup> 筆者がその後調査した東京都東村山市では「聞き'に行く」「聞きながら」となり、中間的な状態を示した。

<sup>7</sup> 語彙によって、また話者によって進行度にバラつきがある音韻変化（≠純然たる音声変化）における「資源」  
観をここで提示している。これは比喩の一種だが、この種の変化を表わすのに適切であると考えて用いた。た  
とえ語彙のレベルでは変化前後の形で揺れていても、集計数値の割合(%)のレベルでは一方通行の数値(%)の流  
れと見なすことにより、揺れが捨象され、固定化・可視化された変化前の形の割合(%)を、「資源」と喩えた。

は残っている事が都竹（1951）に指摘されている。また岡山市のような複合動詞の「前部アクセント」についての指摘（東京都青梅町、伊豆諸島大島元村を含む）の歴史は秋永（1999）に詳しい。これに指摘が無い「前部アクセント」の研究に、佐藤亮一による東京の山の手・下町（東京都東部）と東京都五日市町（東京都西部）の研究（佐藤 1991a, 1991b, 1992, 1993）や、廣戸・大原（1952: 44-47）における島根県浜田市・鳥取県八東村（それぞれ山陰地方の西の端・東の端であり、特殊なアクセントを有する出雲を挟んでいる）の研究がある。これらの研究を総合すれば、東京においても古くは「前部アクセント」が一般的だったと推定される。また動詞連用形由来の名詞の単純語については、これは動詞連用形とは祖語の段階からアクセントが違って、そのことが都竹（1951）で指摘されているが、それは単純語の場合であって、並列の複合語（例：ア[ゲ]サゲ、[ヨ]ミカキ）に関しては、『新明解日本語アクセント辞典』p.(26)の法則 18 を見る限り、だいたい岡山市の複合動詞のようなパターンに従っている。これは東京方言の古い複合パターンに関する傍証となる。このように、「前部アクセント」という共通の出発点から岡山市や東京などの共時態が生じていると考えること、岡山市を含む山陽地方の共時態を調べることで東京の歴史を考えることは決して無理な話ではない。

#### 4. 岡山市の話者 A による網羅的な内省調査

調査形態については、本来は網羅的な内省調査を行うべきだが、ほとんどの話者がこれに耐えられないと考えられたため、原則として読み上げ調査のみ実施した。「耐えられない」理由としては話者の年齢・体力の問題や、音韻・意味に対するセンスの問題が挙げられる。本節ではこの点を補完する為に、岡山市北区内山下（岡山城のすぐ横）で生れて 18 歳まで過ごしたのち東京に出た話者 A（高山澄子 1949-；筆者の母）を被調査者として、表 1（433 語）の語彙の網羅的な内省調査を実施して表 3 にまとめた。18 歳以降は何らかの標準語の影響が考えられるが、少なくとも複合動詞のアクセントに関する限り、非標準語的な特徴を強く保っていることを確認している。とは言え方言話者の世代としてはひとまわり若い世代と見なす必要がある。

調査票（話者用・調査者用）は表 1（433 語）の「漢字」から左の部分を印刷し、調査者用では右側を記入欄とした。表 1 に存在しない、表 3 の新たな省略記号は次のような意味である。

前核： 前部要素の核の位置（前から n モーラ目）；話者 A の場合。「A 前」と同じ意味。

第一： 第一声。最も自然な発音を最初に言うようにお願いした。但し、第一声以外に最も自然な発音が存在する事がのちに判明した場合はそちらを採用した。この「第一」のデータのみを対象として表 2 と同様の分析を行う。いわゆる「系列効果」は、内省調査というものの性質上、ほぼ存在しないと考えられる。

第二、第三、第四： 第二声、第三声、第四声。自然または可能な発音を、言った順に並べた（「第一」以外で）。第五声は存在しなかった。「自然」と「可能」の境界は曖昧であり、厳密な区別ではないが、調査の姿勢としては区別を心掛けた。「自然」は「自分がよく使う」、「可能」は「自分は殆ど使わないが有り得る」、「不可」は「自分は使わないし有り

得ない」という意味を想定している。但し、備考に「可能」と書いてあっても「自然」な場合がある可能性は否定できない。「可能」という表記は「自然または可能」の意であると解釈すれば正確である。「第一・第二・第三・第四」に存在しないデータは全て「不可」の発音である。「第二・第三・第四」が表1と同様の分析の対象とならないのは、単語によって存在したりしなかったりするため、「正順・逆順」のように等価関係にあるとは見なせず、また「正順・逆順」は基本的にどれも「最も自然な発音」が系列効果込みで現れていると考えられるのに対し、「第二・第三・第四」は寧ろマイナーな発音を拾い集めたものに過ぎないからである。「第五声」は存在しなかったが、そもそも調査自体が「前部中」型、「境界」型、次末核型、無核型の4種類についてそれが可能かどうか尋ねるという方式のもので、2単位形などは端から存在しないものとして調査している。

備考： 話者の内省に関する補足事項。「第一・第二・第三・第四」に関する補足を中心とするが、前部要素の核の有無と位置に関する補足や、アクセントと意味との関係に関する補足などを述べる場合もある。1つの文が複数行に渡ることがある。

n 回目調査 (2012/1/0d)： 「正順」で1ページずつ計8回の調査を1/04から07の期間に実施した。内省調査は被調査者への負担が大きく、小分けにして実施するほかなかった。6回目中盤以降、「第四」を有する語彙が突如として増大するが、これは調査に慣れて「可能」の意味する範囲が広がった為であると考えられ、6回目中盤以前で「不可」とされたものの一部が、実は「可能」であったとして拾い上げられたと考えられる。この点に限らず、回を重ねる毎に手際が良くなった。

なお、本稿の議論を理解する上では、次ページ以降に示す表3の数字や文字を細かく読んで行く必要はなく、大体の様子が掴めればよい(本稿で扱った433語の単語リストは表3を参照)。また、表2.aと同様のものを表3の「第一」(系列効果のほぼ存在しない「正順」に相当)のデータから作成して表4.aとし、表3に続いて示した。但し「第一」が「#」(データ無し)のものは、3節の分析とのバランスを取るため「第二」を代りのデータとした。

既に表2.aとその分析によって話者Aが「岡山市方言の複合動詞のアクセント」を有する話者であると認めるに差し支えないことは分かっているのも、ここでは表2.aと表4.aとの違いを見る。「分布状況」を見ると、表2.aの方が「なし」型の数が多い。「前部m数」に目立った差は無い。「後部m数」を見ると、表2.aの方が前部要素平板型2モーラかつ後部要素3モーラのものからの次末核化、および前部要素起伏型2モーラかつ後部要素3モーラのものからの無核化の勢いが少し強い。即ち、内省調査の特徴として、読み上げ調査と比べて後部アクセントがやや抑圧されて前部アクセントがやや水増しされる傾向が指摘できる。このことは話者Aにおいて前部アクセントの方が後部アクセントよりも言わば「規範的」であること、内省調査の方が読み上げ調査よりも言わば「規範的な発音」が出やすいこと、の2点の可能性を示唆しているが、そのような問題を考察するには複合動詞のアクセント以外の現象も見ることがある。

表 3.1. 岡山市の話者 A の内省調査による複合動詞のアクセント資料 (8 分の 1)

番号	前 拍	全 拍	前 核	かな	漢字	第 一	第 二	第 三	第 四	備考(1回目調査:2012/1/04)
1	2	4	1	あり+える	有り+得る	3				
2	1	4	1	い+あてる	射+当てる	3	1			1は可能だが不自然
3	1	4	0	い+すぎる	居+過ぎる	3	1			
4	1	4	1	い+とめる	射+止める	3				
5	2	4	0	うき+でる	浮き+出る	2	3			
6	1	4	0	き+がえる	着+替える	3				
7	1	4	0	き+つける	着+付ける	3	1			3は「着せる」/1は「着馴れる」
8	1	4	0	し+あげる	仕+上げる	3	1			
9	1	4	0	し+いれる	仕+入れる	3				
10	1	4	0	し+かえる	仕+替える	#	3			意味不明だが無理に読んだら3
11	1	4	0	し+かける	仕+掛ける	3	1			
12	1	4	0	し+たてる	仕+立てる	3				
13	1	4	0	し+つける	仕+付ける	3				意味が「駈け」なので1は不可
14	1	4	0	し+むける	仕+向ける	3				
15	1	4	0	し+わける	仕+分ける	3	1			1は可能だが意味が違う
16	2	4	0	つき+でる	突き+出る	3	2			前部要素が単独で0の場合
16	2	4	1	つき+でる	突き+出る	3	1			前部要素が単独で1の場合
17	1	4	1	で+かける	出+掛ける	3	0			
18	1	4	1	で+すぎる	出+過ぎる	3	1	0		1は可能だが意味が違う
19	1	4	0	に+しめる	煮+染める	3				
20	1	4	0	に+たてる	煮+立てる	3				
21	1	4	0	に+つける	煮+付ける	3	1	0		
22	1	4	0	に+つめる	煮+詰める	3	1			
23	2	4	0	ぬけ+でる	抜け+出る	3	2			
24	1	4	0	ね+すぎる	寝+過ぎる	3	1	0		
25	1	4	0	ね+ぼける	寝+惚ける	3	0			
26	2	4	1	はい+でる	這い+出る	1	3			3は可能だが余り使わない
27	2	4	1	はみ+でる	食み+出る	1	3	0		3は可能だが余り使わない
28	1	4	1	ひ+われる	干+割れる	#	1			意味不明だが無理に読んだら1
29	2	4	1	ふき+でる	吹き+出る	1	3	0		
30	1	4	1	み+あきる	見+飽きる	3	0			0は可能だが余り使わない
31	1	4	1	み+あげる	見+上げる	0	3	1		
32	1	4	1	み+かける	見+掛ける	3	0			
33	1	4	1	み+かねる	見+兼ねる	0	3	1		
34	1	4	1	み+さげる	見+下げる	3	1	0		
35	1	4	1	み+すてる	見+捨てる	0	3			
36	1	4	1	み+つける	見+付ける	3	1	0		
37	1	4	1	み+つめる	見+詰める	0	3	1		
38	1	4	1	み+なれる	見+慣れる	3	0	1		
39	1	4	1	み+わける	見+分ける	3	0			
40	2	4	0	わき+でる	湧き+出る	2	3			
41	2	5	0	あげ+かける	上げ+掛ける	2	4	0		
42	2	5	0	あて+はめる	当て+嵌める	2	4	0		
43	2	5	1	あみ+おえる	編み+終える	1	4			
44	2	5	1	あり+すぎる	有り+過ぎる	4	1	0		
45	1	5	0	い+あわせる	居+合わせる	4	1	2	0	(何故か)2も自然
46	2	5	0	いい+あてる	言い+当てる	2	4	0		
47	2	5	0	いい+かえる	言い+換える	2	4	0		
48	2	5	0	いい+すぎる	言い+過ぎる	4	2	0		
49	2	5	1	いき+のびる	生き+延びる	0	4	2		(何故か)1は不可、2は自然
50	2	5	0	いれ+かえる	入れ+替える	2	0	4		
51	2	5	0	いれ+すぎる	入れ+過ぎる	2	4	0		
52	2	5	0	うえ+つける	植え+付ける	4	0	2		
53	2	5	1	うけ+いれる	受け+入れる	0	4			
54	2	5	1	うけ+つける	受け+付ける	4	0			
55	2	5	1	うけ+とめる	受け+止める	4	0			
56	2	5	1	うち+あける	打ち+明ける	4	0			
57	2	5	1	うち+こめる	打ち+込める	4	0			



表 3.2. 岡山市の話者 A の内省調査による複合動詞のアクセント資料 (8 分の 2)

番号	前 拍	全 拍	前 核	かな	漢字	第 一	第 二	第 三	第 四	備考(2回目調査:2012/1/05)
58	2	5	1	うち + とける	打ち + 解ける	0	4			
59	2	5	1	うち + よせる	打ち + 寄せる	4	0			
60	2	5	0	うり + あげる	売り + 上げる	4	0	2		2は可能だが意味が少し変わる
61	2	5	0	おい + かける	追い + 掛ける	2	4			
62	3	5	2	おこり + える	起こり + 得る	4				
63	2	5	0	おし + あてる	押し + 当てる	2	0	4		
64	2	5	1	おり + あげる	織り + 上げる	1	4	0		
65	2	5	1	おり + まげる	折り + 曲げる	4	1	0		
66	2	5	1	おり + まぜる	織り + 交ぜる	4	1			1は可能だが意味が少し変わる
67	2	5	1	かき + あげる	書き + 上げる	1	0	4		
68	2	5	1	かけ + かえる	掛け + 替える	4	0			意味が切れないため1は不可
69	2	5	0	かり + いれる	刈り + 入れる	4	0	2		前部要素は単独で確かに0
70	2	5	0	かれ + はてる	枯れ + 果てる	2	0	4		
71	1	5	1	き + あわせる	来 + 合わせる	4	1	0		
72	2	5	0	きえ + うせる	消え + 失せる	2	4	0		
73	2	5	0	きき + とれる	聞き + 取れる	2	4	0		
74	1	5	1	き + はじめる	来 + 始める	1	4	0		
75	1	5	0	き + はじめる	着 + 始める	1	0	4		
76	2	5	1	きり + つける	切り + 付ける	4	1	0		
77	2	5	1	くい + あきる	食い + 飽きる	1	4	0		
78	2	5	1	くい + とめる	食い + 止める	4	0	2		前部要素が「食う」とは思わない
79	2	5	1	くみ + あげる	組み + 上げる	4	0	1		2だと「汲み上げる」になる
80	2	5	1	くみ + たてる	組み + 立てる	4	0	2		意味が切れないため1は不可
81	2	5	0	けし + とめる	消し + 止める	2	4	0		
82	2	5	1	けり + あげる	蹴り + 上げる	1	4	0		
83	2	5	1	こじ + あげる	こじ + 開ける	1	4	0		
84	2	5	1	こじ + つける	こじ + 付ける	4	0			意味が切れないため1は不可
85	3	5	0	ころげ + でる	転げ + 出る	3	4			
86	2	5	1	さし + かえる	差し + 替える	4	0			意味が切れないため1は不可
87	2	5	0	しに + かける	死に + 掛ける	2	4	0		
88	1	5	0	し + はじめる	仕 + 始める	1	4	0		
89	2	5	1	しめ + つける	締め + 付ける	4	2	0		(何故か)1は不可、2は自然
90	2	5	1	すみ + かえる	住み + 替える	4	1	0		
91	2	5	1	すり + きれる	擦り + 切れる	1	4	0		
92	2	5	1	せめ + よせる	攻め + 寄せる	1	4	0		
93	2	5	0	そめ + つける	染め + 付ける	2	4	0		
94	2	5	0	たき + つける	焚き + 付ける	2	4	0		
95	2	5	1	たち + かける	立ち + 掛ける	1	4	0		
96	2	5	1	たち + がれる	立ち + 枯れる	4	0			意味が切れないため1は不可
97	2	5	1	たべ + つける	食べ + 付ける	1	4	0		
98	2	5	1	たれ + こめる	垂れ + 籠める	4	0			意味が切れないため1は不可
99	2	5	1	たて + かける	立て + 掛ける	1	4	0		
100	2	5	0	つき + つける	突き + 付ける	2	0	4		この単語では1は不自然
101	2	5	0	つみ + あげる	積み + 上げる	2	4	0		
102	2	5	0	つり + あげる	釣り + 上げる	2	4	0		
103	2	5	1	つめ + かえる	詰め + 替える	2	4	0		(何故か)1は不可、2は自然
104	2	5	1	でき + かける	出来 + 掛ける	1	4	0		
105	2	5	1	でき + すぎる	出来 + 過ぎる	0	4			
106	1	5	1	で + つづける	出 + 続ける	4	0	1		
107	1	5	1	で + はじめる	出 + 始める	1	4	0		
108	1	5	1	で + むかえる	出 + 迎える	4	0			意味が切れないため1は不可
109	2	5	0	とび + おりる	飛び + 降りる	2	4	0		
110	2	5	1	とり + いれる	取り + 入れる	4	0			意味が切れないため1は不可
111	2	5	1	とり + かえる	取り + 替える	4	0			意味が切れないため1は不可
112	2	5	1	とり + きめる	取り + 決める	4	0			意味が切れないため1は不可
113	2	5	1	とり + たてる	取り + 立てる	4	0	1		
114	2	5	1	とり + よせる	取り + 寄せる	4	0	2		(何故か)1は不可、2は自然

表 3.3. 岡山市の話者 A の内省調査による複合動詞のアクセント資料 (8 分の 3)

番号	前 拍	全 拍	前 核	かな	漢字	第 一	第 二	第 三	第 四	備考(3回目調査:2012/1/05)
115	2	5	1	にげ+のびる	逃げ+延びる	1	4	0		
116	3	5	2	ねがい+でる	願い+出る	2	4	3		(何故か)3も自然
117	2	5	1	のみ+こめる	飲み+込める	4	0	1		意味は切れないが1も可能
118	2	5	1	はね+おきる	跳ね+起きる	1	4			
119	2	5	1	はね+のける	撥ね+除ける	1	4	0		「よ」無しでも無核は可能だが
120	2	5	0	はり+さける	張り+裂ける	2	4	0		例えば「撥ね除けるよ」のように
121	2	5	0	ひき+うける	引き+受ける	2	4	0		「よ」が付くと無核がより自然に
122	2	5	0	ひき+しめる	引き+締める	2	4	0		但し「よ」有りでも不可のことも。
123	2	5	0	ふき+かえる	掻き+替える	4	0			意味が切れないため2は不可
124	2	5	0	ふみ+こえる	踏み+越える	2	4	0		
125	2	5	0	ふり+あげる	振り+上げる	2	4	0		
126	2	5	1	ぶち+あける	ぶち+開ける	4	0			「打ち明け」なので1は不可
127	2	5	1	ぶち+あてる	ぶち+当てる	1	4	0		
128	2	5	1	ぶち+まける	ぶち+撒ける	4	0			意味が切れないため1は不可
129	2	5	1	ほめ+たてる	褒め+立てる	1	4	0		
130	2	5	0	まき+あげる	巻き+上げる	1	4	0		意味は切れないが1は自然
131	2	5	1	まち+ぶせる	待ち+伏せる	4	0			意味が切れないため1は不可
132	1	5	1	み+くらべる	見+比べる	4	0	1		
133	2	5	1	みせ+つける	見せ+付ける	4	0			意味が切れないため1は不可
134	1	5	1	み+ちがえる	見+違える	4	0			意味が切れないため1は不可
135	1	5	1	み+つづける	見+続ける	1	0	4		
136	1	5	1	み+わすれる	見+忘れる	1	4	0		
137	3	5	2	もうし+でる	申し+出る	4	0			意味が切れないため1は不可
138	2	5	1	もち+あげる	持ち+上げる	4	0	1		
139	2	5	0	やけ+こげる	焼け+焦げる	2	4	0		無核に付く「よ」の注意喚起力は
140	2	5	0	ゆき+すぎる	行き+過ぎる	2	4	0		「よ」が低いと近くの人に言う感じ
141	2	5	0	よび+すてる	呼び+捨てる	4	0	2		「よ」が高いと遠くにも向けて。
142	2	5	1	よみ+かける	読み+掛ける	1	4	0		
143	1	3	1	い+ぬく	射+抜く	2	0			意味が切れないため1は不可
144	1	3	0	き+だす	焔+出す	1	2	0		
145	1	3	1	き+だす	来+出す	1				
146	1	3	1	け+こむ	蹴+込む	#	1			意味不明だが無理に読んだら1
147	1	3	1	け+だす	蹴+出す	#	1			意味不明だが無理に読んだら1
148	1	3	0	し+きる	仕+切る	2	0			
149	1	3	0	し+くむ	仕+組む	2				意味が切れないため0が不可
150	1	3	0	し+こむ	仕+込む	2				意味が切れないため0が不可
151	1	3	0	し+だす	仕+出す	1	2	0		意味は「仕始める」
152	1	3	1	で+あう	出+会う	2	0			
153	1	3	1	で+きる	出+切る	1	2	0		
154	1	3	1	で+ばる	出+張る	#	2			意味不明だが無理に読んだら2
155	1	3	1	で+むく	出+向く	2	0			
156	1	3	0	に+あう	似+合う	2	0			
157	1	3	0	に+こむ	煮+込む	1	2	0		
158	1	3	0	に+だす	煮+出す	1	2	0		1「煮始める」/2.0「汁を出す」
159	1	3	0	に+たつ	煮+立つ	1	2	0		
160	1	3	0	に+つく	似+付く	1	2	0		「似ても似付かない」で内省
161	1	3	0	ね+いる	寝+入る	2	0			
162	1	3	0	ね+こむ	寝+込む	1	2	0		
163	1	3	0	ね+つく	寝+付く	1	2	0		
164	1	3	0	ね+とる	寝+取る	1	2	0		場面で無核か次末核が決まる
165	1	3	1	み+あう	見+合う	2	0			事実を淡々と述べている・
166	1	3	1	み+いる	見+入る	2	0			状態を表す・客観的なら次末核
167	1	3	1	み+いる	魅+入る	0	2			勢いがある・人に対して言う・
168	1	3	1	み+きる	見+切る	0	2			相手をしっかりと意識する・
169	1	3	1	み+こす	見+越す	0	2			感情を表す・主観的なら無核
170	1	3	1	み+こむ	見+込む	0	2			という使い分けがあると感じる。
171	1	3	1	み+しる	見+知る	1				

表 3.4. 岡山市の話者 A の内省調査による複合動詞のアクセント資料 (8 分の 4)

番号	前拍	全拍	前核	かな	漢字	第一	第二	第三	第四	備考(4回目調査; 2012/1/06)
172	1	3	1	み + だす	見 + 出す	1	2	0		
173	1	3	1	み + とる	看 + 取る	2	0			
174	1	3	1	み + とる	見 + 取る	1	0			2は「看取る」になる
175	1	3	1	み + なす	見 + 做す	2	0			
176	1	3	1	み + ぬく	見 + 抜く	2	0			
177	1	3	1	み + はる	見 + 張る	0				1, 2は不可
178	1	3	1	み + まう	見 + 舞う	2	0			
179	1	3	1	み + やる	見 + 追る	2	0			
180	2	4	0	あて + こむ	当て + 込む	2	0	3		
181	2	4	1	あみ + こむ	編み + 込む	1	3	0		
182	2	4	1	あみ + だす	編み + 出す	1	3	0		
183	2	4	1	あり + つく	在り + 付く	3	0	2		(何故か) 1は不可、2は自然
184	1	4	0	い + あわす	居 + 合わす	3	0	2	1	
185	2	4	0	いい + あう	言い + 合う	2	3	0		
186	2	4	0	いい + おく	言い + 置く	3	0	2		
187	2	4	0	いい + きる	言い + 切る	2	3	0		
188	2	4	0	いい + けす	言い + 消す	2	3	0		
189	2	4	0	いい + さす	言い + 止す	#	3			意味不明だが無理に読んだら3
190	2	4	0	いい + たす	言い + 足す	2	3	0		
191	2	4	0	いい + だす	言い + 出す	2	3	0		
192	2	4	0	いい + つぐ	言い + 継ぐ	2	3	0		
193	2	4	0	いい + なす	言い + 做す	#	3			意味不明だが無理に読んだら3
194	2	4	0	いい + はる	言い + 張る	2	3	0		
195	2	4	0	いい + よる	言い + 寄る	2	3	0		
196	1	4	1	い + おとす	射 + 落とす	3	1	0		
197	2	4	1	いき + ぬく	生き + 抜く	3	0			
198	2	4	1	ふっ + こむ	吹っ + 込む	#	3			意味不明だが無理に読んだら3
199	2	4	1	ふっ + とぶ	吹っ + 飛ぶ	1	3	0		1は音声としては2だが1とした
200	2	4	1	ふえ + だす	増え + 出す	1	3	0		
201	2	4	1	ふき + けす	吹き + 消す	1	3	0		
202	2	4	1	ふき + こむ	吹き + 込む	1	3	0	2	自然なのは1だが2も可能
203	2	4	0	ふき + こむ	拭き + 込む	2	3	0		
204	2	4	1	ふき + だす	吹き + 出す	1	3	0		
205	2	4	1	ふき + だす	噴き + 出す	1	3	0		
206	2	4	0	ふき + とる	拭き + 取る	2	3	0		
207	2	4	1	ふけ + ゆく	更け + 行く	1	3	0		
208	2	4	0	ふみ + いる	踏み + 入る	2	3	0		
209	2	4	0	ふみ + きる	踏み + 切る	2	3	0		
210	2	4	0	ふみ + けす	踏み + 消す	2	3	0		
211	2	4	0	ふみ + こす	踏み + 越す	2	3	0		
212	2	4	0	ふみ + こむ	踏み + 込む	3	2	0		
213	2	4	0	ふみ + だす	踏み + 出す	2	3	0		
214	2	4	0	ふみ + ぬく	踏み + 抜く	3	2	0		
215	2	4	0	ふり + あう	振り + 合う	2	3	0		
216	2	4	0	ふり + きる	振り + 切る	2	3	0		
217	2	4	0	ふり + こむ	振り + 込む	2	3	0		
218	2	4	1	ふり + こむ	降り + 込む	1	3	0		
219	2	4	1	ふり + だす	降り + 出す	1	3	0		
220	2	4	0	ふり + だす	振り + 出す	2	3	0		
221	2	4	0	ふり + まく	振り + 撒く	3	0	2		
222	2	4	0	ふり + むく	振り + 向く	2	3	0		
223	2	4	1	ふり + やむ	降り + 止む	1	3	0		
224	2	4	0	ふれ + あう	触れ + 合う	2	3	0		
225	2	4	0	ふれ + こむ	触れ + 込む	3	0	2		
226	2	4	0	ふん + ばる	踏ん + 張る	3				1, 2, 0は不可
227	2	4	1	ぶち + こむ	ぶち + 込む	1	3	0		
228	2	4	1	ぶち + わる	ぶち + 割る	1	3	0		

表 3.5. 岡山市の話者 A の内省調査による複合動詞のアクセント資料 (8 分の 5)

番号	前拍	全拍	前核	かな	漢字	第一	第二	第三	第四	備考(5回目調査; 2012/1/07)
229	2	4	1	へし + おる	押し + 折る	3	1	0		
230	1	4	1	へ + めぐる	経 + 巡る	#	3			意味不明だが無理に読んだら3
231	2	4	0	まき + こむ	巻き + 込む	2	3	0		
232	2	4	0	まき + つく	巻き + 付く	2	3	0		
233	1	4	1	み + あたる	見 + 当たる	0	3			
234	1	4	1	み + あるく	見 + 歩く	3	0			
235	1	4	1	み + あわす	見 + 合わす	0	3	1		
236	1	4	1	み + いだす	見 + 出だす	2	3	0		(何故か) 1は不可、2は自然
237	2	4	1	みえ + すく	見え + 透く	0				1, 2, 3は不可
238	2	4	1	みえ + だす	見え + 出す	1	3	0		
239	1	4	1	み + おくる	見 + 送る	0				1, 2, 3は不可
240	1	4	1	み + おとす	見 + 落とす	3	1	0		
241	1	4	1	み + おろす	見 + 下ろす	3	1	0		
242	1	4	1	み + かえす	見 + 返す	0	3			0「認めさせる」/3「見直す」
243	1	4	1	み + かえる	見 + 返る	3	0			なお「見 + 直す」は順に2 3 0 1
244	1	4	1	み + かぎる	見 + 限る	3	0			という発音が聞かれた。
245	1	4	1	み + かわす	見 + 交わす	0	1	3		0は故意に、1は偶然、目が合う
246	1	4	1	み + くだす	見 + 下す	1	3	0		
247	1	4	1	み + くびる	見 + 絞る	3	0			
248	1	4	1	み + ごろす	見 + 殺す	3	0			
249	1	4	1	み + すかす	見 + 透かす	0	3			
250	1	4	1	み + すごす	見 + 過ごす	0	3	1		1は「見落とす」の場合
251	1	4	1	み + すます	見 + 澄ます	#	1			「聞き澄ます2」から類推して1
252	2	4	1	みせ + あう	見せ + 合う	1	3	2	0	(何故か) 2も自然で意味は同じ
253	1	4	1	み + つかる	見 + 付かる	1	3	0		
254	1	4	1	み + つくす	見 + 尽くす	1	3	0		
255	1	4	1	み + つもる	見 + 積もる	3	0			
256	1	4	1	み + とおす	見 + 通す	0	3			
257	1	4	1	み + なおす	見 + 直す	3	1	0		旧番251で2が出現したが不可
258	1	4	1	み + ならう	見 + 習う	3	0			
259	1	4	1	み + のがす	見 + 逃す	0	3	1		
260	1	4	1	み + のこす	見 + 残す	1	3	0		
261	1	4	1	み + はなす	見 + 離す	3	0			
262	1	4	1	み + はらす	見 + 晴らす	0	3			
263	1	4	1	み + ひらく	見 + 開く	1	3	0		
264	1	4	1	み + まがう	見 + 紛う	3	0			
265	1	4	1	み + まもる	見 + 守る	3	0			
266	1	4	1	み + まわす	見 + 回す	1	3	0		
267	1	4	1	み + まわる	見 + 回る	0	3			
268	1	4	1	み + やぶる	見 + 破る	3	0			
269	1	4	1	み + わたす	見 + 渡す	0	3			
270	2	4	0	むき + あう	向き + 合う	3	0	2		
271	2	4	0	むき + だす	剥き + 出す	2	3	0		意味は「剥いて出す」
272	2	4	1	もち + さる	持ち + 去る	3	0	1		
273	2	4	1	もち + だす	持ち + 出す	1	3	0		
274	2	4	1	もち + よる	持ち + 寄る	3	0	1		
275	2	4	0	もみ + あう	揉み + 合う	3	0	2		「揉む」自体0, 1で揺れているが
275	2	4	1	もみ + あう	揉み + 合う	3	0	1		単独は0、前部は1が優勢に。
276	2	4	1	もみ + けす	揉み + 消す	3	0	1		(何故か) 2は不可
277	2	4	0	もり + こむ	盛り + 込む	2	3	0		前部要素は単独で確かに0
278	2	4	0	やき + きる	焼き + 切る	2	3	0		
279	2	4	0	やき + つく	焼き + 付く	2	3	0		
280	2	4	0	やけ + しぬ	焼け + 死ぬ	2	3	0		
281	2	4	0	やけ + つく	焼け + 付く	2	3	0		
282	2	4	1	やみ + つく	病み + 付く	3	0			
283	2	4	0	やり + あう	遣り + 合う	2	3	0		
284	2	4	0	やり + ぬく	遣り + 抜く	2	3	0		
285	2	4	0	ゆき + あう	行き + 会う	3	0			2だと「出くわす」の意にならない

表 3.6. 岡山市の話者 A の内省調査による複合動詞のアクセント資料 (8 分の 6)

番号	前拍	全拍	前核	かな	漢字	第一	第二	第三	第四	備考(6回目調査:2012/1/07)
286	2	4	0	ゆき+かう	行き+交う	2	3	0		
287	2	4	0	ゆき+つく	行き+着く	2	3	0		
288	2	4	0	よび+あう	呼び+合う	2	3	0		
289	2	4	0	よび+こむ	呼び+込む	2	3	0		
290	2	4	0	よび+だす	呼び+出す	2	3	0		
291	2	4	1	よみ+とる	読み+取る	3	0	1		
292	2	4	0	より+あう	寄り+合う	3	0	2		
293	2	4	0	より+そう	寄り+添う	2	3	0		
294	2	4	1	より+だす	選り+出す	1	3	0		前部要素は単独で確かに1
295	2	4	0	より+つく	寄り+付く	3	0	2		
296	2	4	1	より+ぬく	選り+抜く	3	0	2		(何故か)1は不可、2は自然
297	2	4	0	わき+たつ	沸き+立つ	2	3	0		
298	2	4	0	わり+きる	割り+切る	2	3	0		
299	2	4	0	わり+こむ	割り+込む	2	3	0		
300	2	4	0	わり+だす	割り+出す	2	3	0		
301	2	4	0	わり+びく	割り+引く	3	0			
302	2	4	0	わり+ふる	割り+振る	3	0	2		
303	3	5	2	あいし+あう	愛し+合う	2	4	0		前部要素は単独で確かに2
304	2	5	0	あて+はまる	当て+嵌まる	2	4	0		
305	2	5	1	あり+あまる	有り+余る	1	4	0		
306	2	5	0	いい+かえす	言い+返す	2	4	0		
307	2	5	0	いい+つかる	言い+付かる	2	4	0		
308	2	5	0	いい+なおす	言い+直す	2	4	0		
309	3	5	2	いかし+きる	生かし+切る	2	4	0		
310	2	5	1	いき+かえる	生き+返る	1	4	0		
311	2	5	1	いき+のこる	生き+残る	4	1	0		
312	3	5	2	うごき+だす	動き+出す	2	4	0		
313	2	5	1	うち+ころす	撃ち+殺す	4	1	2	0	(何故か)2も可能
314	2	5	0	うり+あるく	売り+歩く	2	4	0		
315	2	5	0	おい+かえす	追い+返す	2	4	0		
316	2	5	1	おき+あがる	起き+上がる	4	0	1	2	(何故か)2も可能
317	2	5	0	おし+たおす	押し+倒す	2	4	0		
318	3	5	0	おぼれ+しぬ	溺れ+死ぬ	3	4	0		
319	3	5	2	おもい+こむ	思い+込む	2	4	0	3	(何故か)3も可能
320	2	5	1	おれ+まがる	折れ+曲がる	1	4	0	2	(何故か)2も可能
321	2	5	0	かい+たたく	買い+叩く	2	4	0		
322	2	5	0	かい+まくる	買い+まくる	2	4	0		
323	3	5	2	かえり+つく	帰り+着く	2	4	0	3	(何故か)3も可能
324	2	5	1	かき+なおす	書き+直す	4	0	1	2	(何故か)2も可能
325	2	5	1	かき+まわす	掻き+回す	1	4	0		
326	2	5	1	かけ+まわる	駆け+回る	1	4	0		
327	3	5	2	かじり+つく	齧り+付く	2	4	0	3	(何故か)3も可能
328	2	5	1	かみ+ころす	噛み+殺す	1	2	4	0	(何故か)2も可能
329	3	5	2	からみ+つく	絡み+付く	2	3	4	0	(何故か)3も可能
330	2	5	0	きえ+かかる	消え+掛かる	2	4	0		
331	2	5	0	きき+おとす	聞き+落とす	2	4	0		
332	2	5	0	きき+もらす	聞き+漏らす	2	4	0		
333	3	5	0	きこえ+だす	聞こえ+出す	3	4	0		2は不可
334	2	5	1	きり+おとす	切り+落とす	1	4	0	2	(何故か)2も可能
335	2	5	1	きり+はなす	切り+離す	4	0	1	2	(何故か)2も可能
336	2	5	1	くい+あらす	食い+荒らす	1	2	4	0	(何故か)2も可能
337	3	5	2	くさり+きる	腐り+切る	2	3	4	0	(何故か)3も可能
338	2	5	1	くみ+あわす	組み+合わす	4	0	2		(何故か)1は不可、2は自然
339	2	5	1	くり+あがる	繰り+上がる	4	0	1	2	(何故か)2も可能
340	3	5	2	くわえ+こむ	銜え+込む	2	4	0	3	(何故か)3も可能
341	2	5	1	けり+たおす	蹴り+倒す	1	4	0	2	(何故か)2も可能
342	2	5	1	こき+つかう	扱き+使う	1	4	0		

表 3.7. 岡山市の話者 A の内省調査による複合動詞のアクセント資料 (8 分の 7)

番号	前拍	全拍	前核	かな	漢字	第一	第二	第三	第四	備考(7回目調査:2012/1/07)
343	2	5	1	こね + まわす	捏ね + 回す	1	4	0		
344	3	5	2	こびり + つく	こびり + 付く	2	4	0		
345	3	5	2	こまり + きる	困り + 切る	2	4	0		
346	3	5	0	ころげ + こむ	転げ + 込む	3	4	0		
347	3	5	0	さがし + だす	捜し + 出す	3	4	0		
348	2	5	0	さき + かかる	咲き + 掛かる	2	4	0		
349	2	5	1	さし + せまる	差し + 迫る	4	0			
350	3	5	2	さらけ + だす	曝け + 出す	2	4	0		3は不可、前部要素は0でなく2
351	3	5	2	しゃべり + だす	喋り + 出す	2	4	0		
352	3	5	2	しがみ + つく	しがみ + 付く	2	3	4	0	3も可能、前部は「噛む」なので2
353	2	5	0	しき + なおす	敷き + 直す	2	4	0		
354	2	5	0	しに + いそぐ	死に + 急ぐ	4	2	0		
355	3	5	2	しのび + こむ	忍び + 込む	2	4	0	3	(何故か)3も可能
356	3	5	2	しほり + とる	搾り + 取る	2	3	4	0	(何故か)3も可能
357	2	5	0	しれ + わたる	知れ + 渡る	2	4	0		
358	3	5	2	しんじ + あう	信じ + 合う	2	4	0	3	3も可能、前部要素は1でなく2
359	3	5	2	じゅくし + きる	熟し + 切る	2	4	0		前部要素は0でなく2
360	2	5	1	すき + このむ	好き + 好む	4	1	2	0	(何故か)2も可能
361	3	5	0	すすり + なく	囁り + 泣く	2	0	4	3	3も可能、前部要素は2でなく0
362	2	5	1	すみ + かわる	住み + 替わる	1	4	0		
363	2	5	1	すり + へらす	磨り + 減らす	1	2	4	0	(何故か)2も可能
364	2	5	1	ずり + さがる	ずり + 下がる	1	4	0		
365	3	5	2	そびえ + たつ	聳え + 立つ	2	4	0		
366	2	5	1	そり + かえる	反り + 返る	1	2	4	0	(何故か)2も可能
367	3	5	2	たおれ + こむ	倒れ + 込む	2	3	4	0	(何故か)3も可能
368	3	5	2	たすけ + あう	助け + 合う	2	3	4	0	(何故か)3も可能
369	3	5	2	たずね + あう	尋ね + 合う	2	3	4	0	(何故か)3も可能
370	3	5	2	たたき + わる	叩き + 割る	2	3	4	0	(何故か)3も可能
371	2	5	1	たち + あがる	立ち + 上がる	1	4	0	2	(何故か)2も可能
372	2	5	1	たち + どまる	立ち + 止まる	4	0			
373	2	5	1	たち + なおる	立ち + 直る	4	0			
374	2	5	1	たて + なおす	立て + 直す	4	0	1		「建て直す」なら1 4 0で1が最善
375	3	5	2	たどり + つく	辿り + 着く	2	3	4	0	(何故か)3も可能
376	2	5	1	たべ + おわる	食べ + 終わる	1	0	4		
377	2	5	1	たれ + さがる	垂れ + 下がる	1	4	0		
378	2	5	0	だき + おろす	抱き + 下ろす	2	4	0		「突く」自体が0, 1で揺れている
379	2	5	0	つつ + ばしる	突っ + 走る	4	0	2		2は音声通りに2とした
380	2	5	0	つき + ささる	突き + 刺さる	2	1	4	0	1, 2, 4の順で刃が進行する;
381	2	5	1	つけ + あがる	付け + 上がる	4	0	1		刃; 1は当たったばかりで、
382	2	5	0	とい + あわす	問い + 合わす	2	4	0		刃; 2は体重が掛かっていて、
383	2	5	0	とび + まわる	飛び + 回る	4	2	0		刃; 4は刺さったあとの状態。
384	2	5	1	とり + しきる	取り + 仕切る	4	2	0		(何故か)1は不可、2は自然
385	2	5	1	とり + しまる	取り + 締まる	4	0			
386	2	5	0	なき + おとす	泣き + 落とす	2	4	0		
387	2	5	0	なき + くるう	泣き + 狂う	4	2	0		
388	3	5	2	なりの + あう	名乗り + 合う	2	3	4	0	(何故か)3も可能
389	2	5	1	なり + すます	成り + 済ます	2	4	0		(何故か)1は不可、2は自然
390	1	5	0	ね + ころがる	寝 + 転がる	2	1	4	0	(何故か)2が最善
391	2	5	1	のし + かかる	押し + 掛かる	1	2	4	0	(何故か)2も可能
392	2	5	1	のみ + くだす	飲み + 下す	1	2	4	0	(何故か)2も可能
393	2	5	0	のり + うつる	乗り + 移る	2	4	0		
394	2	5	0	はき + ふるす	履き + 古す	2	4	0		
395	3	5	2	はなし + あう	話し + 合う	2	4	0	3	(何故か)3も可能
396	2	5	1	はね + とばす	跳ね + 飛ばす	1	4	0		
397	2	5	0	はれ + あがる	腫れ + 上がる	2	4	0		
398	2	5	0	ひっ + こます	引っ + 込ます	4	0	2		2は音声通りに2とした
399	2	5	0	ひき + ちぎる	引き + 千切る	2	4	0		

表 3.8. 岡山市の話者 A の内省調査による複合動詞のアクセント資料 (8 分の 8)

番号	前拍	全拍	前核	かな	漢字	第一	第二	第三	第四	備考(8回目調査:2012/1/07)
400	2	5	1	ふき + あがる	吹き + 上がる	1	2	4	0	
401	2	5	0	ふり + おとす	振り + 落とす	2	4	0		
402	2	5	0	ふり + かえる	振り + 返る	2	4	0		
403	2	5	1	ふり + かかる	降り + 掛かる	2	1	4	0	(何故か)2が最善
404	2	5	0	ふり + しぼる	振り + 絞る	2	4	0		
405	3	5	0	ほうり + だす	放り + 出す	3	4	0		
406	2	5	1	ほり + おこす	掘り + 起こす	1	2	4	0	(何故か)2も可能
407	3	5	2	まかせ + きる	任せ + 切る	2	4	0		
408	2	5	1	まき + ちらす	撒き + 散らす	4	1	2	0	(何故か)2も可能
409	3	5	2	まぎれ + こむ	紛れ + 込む	2	3	4	0	(何故か)3も可能
410	2	5	1	まち + あわす	待ち + 合わす	4	2	0		(何故か)1は不可、2は自然
411	3	5	2	まもり + めく	守り + 抜く	2	4	0		
412	3	5	2	まよい + こむ	迷い + 込む	2	3	4	0	(何故か)3も可能
413	3	5	0	まわり + だす	回り + 出す	3	4	0		
414	1	5	1	み + うしなう	見 + 失う	0	4			
415	1	5	1	み + つくろう	見 + 繕う	4	0			
416	1	5	1	み + まちがう	見 + 間違う	4	0			
417	2	5	0	むき + あわす	向き + 合わす	2	4	0		
418	3	5	2	むせび + なく	咽び + 泣く	2	4	0		前部単独はあえて読むなら2
419	2	5	0	もえ + あがる	燃え + 上がる	2	4	0		
420	2	5	1	もち + かえる	持ち + 帰る	1	4	0		1「何か荷物を」/4「お土産を」
421	2	5	1	もち + はこぶ	持ち + 運ぶ	0	4	1		
422	2	5	0	もり + あがる	盛り + 上がる	2	4	0		
423	2	5	0	やき + つくす	焼き + 尽くす	2	4	0		
424	3	5	2	やぶり + とる	破り + 取る	2	4	0	3	破:2は「破って取る」という動き
425	2	5	0	やり + なおす	遣り + 直す	2	4	0		破:3は「濡らして」でなく(手段)
426	2	5	0	ゆき + つまる	行き + 詰まる	2	4	0		破:4は「破り」が名詞みたい
427	2	5	0	ゆれ + うごく	揺れ + 動く	2	4	0		
428	2	5	1	よじ + のぼる	攀じ + 登る	1	2	4	0	(何故か)2も可能、1と意味同じ
429	2	5	0	よび + もどす	呼び + 戻す	2	4	0		
430	2	5	1	よみ + かえす	読み + 返す	1	4	0		
431	2	5	1	よみ + なおす	読み + 直す	1	2	4	0	(何故か)2も可能
432	3	5	2	よわり + きる	弱り + 切る	2	4	0		
433	3	5	2	わかり + あう	分かり + 合う	2	3	4	0	(何故か)3も可能

表 4.a. 複合動詞の核の有無と位置のデータの分析 (A: 岡山県岡山市北区山下 1949-)

要 点	前部要素の型 とモーラ(m)数	後部要素 の m 数	複合動詞の核の有無と位置				合 計
			前部中	境界	後部中	なし	
分 布 状 況	平板型 1m	任意	11 (31%)		25 (69%)	0	36
	起伏型 1m		19 (22%)		45 (52%)	22 (26%)	86
	平板型 2, 3m		2 (1%)	111 (79%)	28 (20%)	0	141
	起伏型 2, 3m		101 (59%)	3 (2%)	62 (36%)	6 (3%)	172
前 部 m 数	平板型 2m	任意	1 (1%)	104 (78%)	28 (21%)	0	133
	平板型 3m		1 (13%)	7 (88%)	0	0	8
	起伏型 2m		66 (49%)	3 (2%)	60 (44%)	6 (4%)	135
	起伏型 3m		35 (95%)	0	2 (5%)	0	37
後 部 m 数	平板型 2m	2m	0	44 (72%)	17 (28%)	0	61
		3m	1 (1%)	60 (83%)	11 (15%)	0	72
	起伏型 2m	2m	21 (60%)	0	13 (37%)	1 (3%)	35
		3m	45 (45%)	3 (3%)	47 (47%)	5 (5%)	100

さて、表 4.a のデータは表 2.a のデータとほぼ一致したが、内省調査の価値は寧ろそれ以外の部分にあると考える。表 3 で「第一・第二・第三・第四」として挙げられた「自然または可能」な発音はかなりの広範囲に渡っていて、4 種類が可能なケースも少なくない。このことの背景には、「場面や意味次第で発音が変わる」（話者 A）という事情があると考えられる。「備考」欄に記した、アクセントと意味との関係に関する傾向の記述を抽象化すると、次のようになる。

1. 前部アクセントと後部アクセントで意味が異なる。前部アクセントでは前部要素の動作が意味的に独立しているか、意味的に強調されている。後部アクセントでは前部要素と後部要素が組み合わさり一体となった、ただの足し算ではない意味を表す。従って前部アクセントが可能な場合は後部アクセントも可能であることが非常に多いが、後部アクセントが可能であっても前部アクセントが不可能でない場合は少なくない。
2. 前部アクセントの中でも、元が「前部中」型のものに限り「境界」型のアクセントも取ることが出来て、「前部中」型と「境界」型とで意味が異なる<sup>8</sup>。「前部中」型では前部要素の動作に特殊な意味が付与されることはないが、「境界」型は前部要素の動作を「手段」として後部要素の動作が行われることを表す。前部要素（平板型・起伏型を問わない）が 1 モーラの場合に対する「境界」型は、後部要素の 1 モーラ目に下がり目が来る発音となる（これは 3 節冒頭で述べた「典型的な例外」に当たる）。
3. 後部アクセントの中でも、「次末核」型と「無核」型とで意味が異なる。「事実を淡々と述べている・状態を表す・客観的」なら「次末核」型になり、「勢いがある・相手をしつかりと意識する・感情を表す・主観的」なら「無核」型になる傾向がある<sup>9</sup>。例えば、自分が木に「攀じ登る」場面では「無核」型に、物語の中でジャックが豆の樹に「攀じ登る」ことを子供に話して聞かせる場面では「次末核」型になりやすい（話者 A）。「無核」型は、「終助詞ヨ」が付かなくても可能だが「ヨ」が付くとより自然になる。「無核」型への「ヨ」の付き方には「低接」型と「高接」型がある。「低接」型は近くにいる人間に対して、「高接」型は遠くにも向けて話す場合に用いる傾向がある。

このようなアクセントと意味との関係がどこまで通用するかについては、話者 A 個人の内省でもあり、定かではないが、少なくとも先行研究の説明と重なる部分については「山陽地方など

<sup>8</sup> 同様の現象は、筆者がその後調査を実施した東京都東村山市にも見られる。但し、「前部中」型は複合動詞の表わす動作がそのまま真剣に行われることを表わし、「境界」型はその真剣さの弱まりを表わす。例えば、契約書なら「読み返す」のみ容認されるが、漫画なら「読み返す」も容認される。本気の果し合いなら「殴り殺す」だが、一種の冗談なら「殴り殺す」となる。選挙に協力して「引っ張り回された」場合は「嫌で嫌で仕方がなかった」という意味になるが、「引っ張り回された」場合は「貢献できてよかった」ことを含意する。これはアクセントが前寄りであればあるほど、秋永（2002: 52）の言う「強め」が強まっていると解釈できる。

<sup>9</sup> ここでは話者の内省をそのまま記したが、もしも類型論的に分析するなら、星泉（2010）におけるチベット語の述語の「自称モード（自分に関することを語る）：他称モード（客観的な事実として語る）」の区別が類例として挙げられる。即ち、「無核」型：「次末核」型＝自称モード：他称モードである。筆者がその後調査した東京都東村山市では 4 モーラ畳語の形容動詞においても「ピカピカだ：ピカピカだ〜＝語末核型：無核型＝個別感覚（or 予想外）：共有感覚（or 法則通り）＝自称モード：他称モード」となるが、詳細は別稿に譲る。



の複合動詞のアクセント」一般の性質と見てよいと考える。「1. 前部アクセントと後部アクセントで意味が異なる」以外の現象はどう解釈されるだろうか。

例えば「2. 前部アクセントの中でも、元が「前部中」型のものに限り「境界」型のアクセントも取ることが出来て、「前部中」型と「境界」型とで意味が異なる」は、前部アクセントのまままで核を喪失して動詞の意味が変化する現象と解釈できるかもしれない。岡山市方言の2単位形アクセントにおいて無核化した後部要素「切る、込む」が類例に当たる。

また、例えば「3. 後部アクセントの中でも、「次末核」型と「無核」型とで意味が異なる。「事実を淡々と述べている・状態を表す・客観的」なら「次末核」型になり、「勢いがある・相手をしっかりと意識する・感情を表す・主観的」なら「無核」型になる傾向がある」は、表4.aの数値を見る限り、「無核」型の方が「表出的 (expressive)」<sup>10</sup>ということであり、「無核化」が一定以上捗らずに「次末核化」が大きく進行した話者において「無核」型が有標となった為に生じた意味の区別ではないか、と解釈できるかもしれない。

## 5. おわりに

本稿の議論に関連した様々な課題を、誰がどのように解明してきたかという点について、本稿でまだ述べていない点を中心に、筆者の理解する範囲でまとめてみたい。

澤田はデータの分析手法を確立した上で複合動詞の2型化等の諸現象を指摘したが（澤田（1990）要旨より）、平板型連用形の語末核の喪失が変化の条件になる点については、これは筆者自身による発案であり、上野や澤田の助言・指摘によるものではない。澤田（1990）要旨には次のようにある。

前部アクセントは、複合動詞の前部要素（連用形）のアクセント核の位置をそのまま引き継いでいるといえる。ただしこのとき、「平板型」動詞連用形は末尾モーラに核を持つものと分析する。論文後半では、この地域での連用形と助詞・助動詞の接続の分析を通して、この分析が有利であることを論じている。

これに対して、本稿では次のように指摘することになった。

かくして、共時的には最早無核となった平板型連用形から見れば、複合動詞の内部境界に存在する核は「予期せぬ核」であり、「前部要素の核ではなく、複合動詞の核でしかない」ということになる。

<sup>10</sup> 「表出的 (expressive)」という用語を本稿では用いてきたが、この場合に限り、工藤真由美の用語にも重なっているため、誤解が生じる恐れがある。工藤（2007）によれば、愛媛県宇和島方言の形容詞では「叙述」の「アカイワイ／アカイ(ゼ)」・「元気ナイ／元気ナ(ゼ)」に対して「表出」の「アカヤ」・「元気ヤ」が存在し、「表出」の「アカヤ」にはテンス分化がなく、発話時における話し手の感情・感覚や評価を表出する」とされる。説明を読む限り、前述の星泉（2010）との関係は、「表出：叙述⇄自称モード：他称モード」となる。しかしながら、本稿の「表出的 (expressive)」はあくまでも「音韻的な有標性に基づく意味の強調」を表わす言葉である。セグメントにおける「表出的 (expressive)」の例としては、ハ行音に対するバ行音の共時的な地位が挙げられる。

山陽地方などの複合動詞のアクセントの古層を記録し分析する調査研究で最重要のものは都竹 (1951) であるが、その次に重要なのは廣戸・大原 (1952) である。その廣戸・大原 (1952) には山陰地方の一部では前部要素が起伏型である複合動詞の平板化が著しく先行していると書かれている（従って山田の法則の成立が有望である）が、前部要素が起伏型である複合動詞の平板化が著しく先行しなければ山田の法則が成立する望みは無いという点については、筆者は2月17日に澤田と会談するまで気付かなかった。

前部要素が平板型の場合に内部境界の核が保存される理由と、前部要素が起伏型の場合の平板化が著しく先行しなければ山田の法則は成立しない点について理解し、データと併せて論文を書くことを2月18日に上野に報告したが、その際に、そもそも複合動詞の2型化がなぜ起こるのかについてなかなか上手く説明できないことが最大の問題であると気付くことになった。また同じ機会に新田哲夫（石川県白峰方言において複合動詞が2単位形アクセントで安定していることを確認した研究者）に、岡山市でも一部の語彙で2単位形が観察される事について報告したが、その際に、白峰方言の2単位形は岡山市とは違って安定しているという点が重要であると気付くことになった。

その後、2月末に岡山市で調査しつつ考えを練っていたが、それまでは「意味が条件となって一部の語彙で2単位形や前部アクセントが残る」と考えていたのを、発想を逆転させて、「意味が原因となって多くの語彙で2単位形や前部アクセントが廃される」と考えればよいと気付いた。かくして上野の説く音調句こそが言わば「主役」であるという本稿の説明に至った。少なくとも、複合動詞の2型化について何らかの説明を与えることにはなった。

ところで、「句頭の上昇は語用論的意味による」と主張する「音調句」の概念が、共時的規則ばかりでなく通時的変化の説明に際しても、その「語用論的意味による」という点について有効であると認められた場合（循環論になるが）、上野 (2009) の主張<sup>11</sup>は更に補強されたことになるが、筆者としてはそのように論を運ぶ考えは無い（循環論になるため）。

最後に、今後の調査研究の展望を述べる。本稿と同様の調査を東京の周辺地域の方言において実施することには、今なお意味があると思われる（筆者は東京都東村山市で実施している）。東京都の東部については既に『東京語アクセント資料』(1985) があるが、話者の高齢化の問題があり、今から追跡調査をしてもあまり良い結果は得られないかもしれない。他方で、東京の

<sup>11</sup> 上野 (2009) は「句頭の上昇は右枝分かれ構造による」と主張する理論を取り上げ、これに反論している。例えば「こ[わい目]のおまわりさん」は左枝分かれ構造で、「こ[わい目]の病気」は右枝分かれ構造であるが、前者では句頭の上昇が「目」に生じず、後者では生じやすいため、その理論ではこの種の現象に基づき一般化を実施しているが、上野 (2009) ではこれに反論し、より広範な例（例えば「こ[わい目]のおまわりさん」や「こ[わい目]の病気」など）から一般化して、語用論的な意味を句頭の上昇の原因とする。その際に認知意味論における「図 (figure)・地 (ground)」という用語を用い、「図」において上昇が起こるとしている。本稿の説明を認知意味論的に言い換えるなら、岡山市方言の複合動詞の2単位形アクセントにおける「意味の切れ目」というのは「図」が2つ連続した場合の谷間（「地」）のことを指し、前部アクセントにおける「意味の焦点」というのは「図」を指す（後部要素が「地」となる）。2単位形アクセントや前部アクセントが安定している段階ではアクセントと意味との関係は恣意的だが、これが崩れ始めて前部アクセントや後部アクセントへと変化しつつある段階では有縁的となり、「図」・「地」が生じている。なお複合動詞は（語源的には動詞2つからなり）2項なので、最低でも3項を必要とする枝分かれ構造を構成できず、枝分かれに関する議論とは関係ない。

周辺地域や山陽地方に限らず、これらに類似したアクセント体系を有する地域の複合動詞に、類似の現象が存在するかどうか確かめることは、今からでも可能ではないかと考えられる。

しかしながら、それらの調査によって、高起式・低起式に相当する対立が無く、下げ核のみを有する方言の一般的な性質については分かるかもしれないが、他方で、高起式・低起式に相当する対立が有る方言（例：京都府・大阪府などの方言）や、寧ろそれしかない方言（例：九州に見られる2型アクセント）や、下げ核でなく昇り核のみを有する方言（例：青森県・岩手県などの方言）などについては、特に何も述べることはできない。そこに本稿が行なった調査研究の限界があり、そこから先はまた別様の研究が必要とされることになる。

## 参考文献

- 秋永一枝（1980）『古今和歌集声点本の研究 研究篇上』404-412. 東京：校倉書房。
- 秋永一枝（1999）「江戸アクセントから東京アクセントへ」『東京弁アクセントの変容』東京：笠間書院。
- 秋永一枝（2002）「東京語の発音とゆれ」『現代日本語講座 第3巻』：40-58. 東京：明治書院。
- 上野善道（2009）「句頭の上昇は語用論的意味による」『月刊言語』38巻12号：84-85. 東京：大修館書店
- 金田一春彦監修・秋永一枝編（2001）『新明解日本語アクセント辞典』東京：三省堂。
- 工藤真由美（2007）「愛媛県宇和島市方言の形容詞」工藤真由美編『日本語形容詞の文法—標準語研究を越えて—』：119-146. 東京：ひつじ書房。
- 佐藤亮一（1991a）「東京語アクセントの変化—大正から昭和まで—」『日本語学』10-4. 東京：明治書院。
- 佐藤亮一（1991b, 1992, 1993）『東京語音声の諸相（1）・（2）・（3）』神奈川：フェリス女学院大学文学部。
- 沢田雅司（1991）「1990年度修士論文要旨」『東京大学言語学論集』11号：289。  
（「澤田雅司（1990）『山陽地方の複合動詞のアクセント』東京大学修士論文」の要旨。）
- 柴田武監修，馬瀬良雄・佐藤亮一編（1985）『東京語アクセント資料 上巻・下巻』長野：信州大学人文学部馬瀬研究室。東京：国立国語研究所言語変化第1研究室。
- 高山林太郎（2012）「四モーラ置語を音調と意味で分類する試み」『語彙・辞書研究会第41回研究発表会予稿集』：17-24. 東京：三省堂。
- 都竹通年雄（1951）「動詞の連用形とアクセント」『国語アクセント論叢』：383-412. 東京：法政大学出版局。
- 新田哲夫（2010）「石川県白峰の複合動詞アクセントと諸方言のタイプ」国立国語研究所プロジェクト「危機方言」研究発表会配布資料（2010年8月1日）
- 平山輝男編（1992）『現代日本語方言大辞典 第1巻』：508. 東京：明治書院。
- 廣戸惇・大原孝道（1952）『山陰地方のアクセント』：44-47. 島根：報光社。
- 編集委員会編（2002）『日本国語大辞典第二版』東京：小学館。

星泉 (2010) 「14 世紀チベット語文献『王統明示鏡』における存在動詞」『東京大学言語学論集』  
29 号 : 29-68.

## The Accents of Compound Verbs in Okayama City Dialect

TAKAYAMA Rintaro

takayama\_rintaro@nifty.com

**Keywords:** Sanyo region, Okayama city in Okayama prefecture, Onomichi city in Hiroshima prefecture, Japanese, Accent, Compound verb, Renyo-form, Shushi-form, Meaning and intonational phrase, Losses of accent kernel and intonational phrase, Preservation of accent kernel, Yamada's law.

### Abstract

In this paper, “front-accent” refers to the accent of compound verbs which has its descending kernel either in the front-part of the verb or between the front-part and the back-part, whereas “back-accent” refers to the accent of compound verbs which has, on the whole, a penultimate kernel or no kernel. In Tokyo dialect, back-accent is dominant, while some expressive words can be front-accented. In addition, there exists the so-called “Yamada’s law”, which asserts that if the front-part itself has no kernel, then the back-accent has a penultimate kernel, and if it has a kernel, then the back-accent has no kernel. On the other hand, in Sanyo region dialects, the accent systems of which resemble that of Tokyo dialect, front-accent—which preserves the kernel of the front-part—and back-accent—which do not—coexist in a certain proportion, and in some dialects of the Sanyo region, it may be that someday Yamada’s law will become reality. Evidence from the area surrounding Tokyo certainly suggest that Tokyo dialect formerly had a Sanyo region-like accent system of compound verbs. The present paper points out the following. Firstly, the change from two-unit-accent to front-accent and the change from front-accent to back-accent are indeed the losses of accent kernel and intonational phrase of the back-part and the front-part respectively, and are indeed the unitization of two intonational phrases caused by the meaning of the compound verb. Secondly, the front-accented type which has a kernel on the inner boundary of the compound verb cannot be changed into the no-kernel type of back-accent because the kernel is no longer the kernel of the front-part verb synchronically. Thirdly, the change to no-kernel type needs to significantly precede the change to penultimate-kernel type in order for Yamada’s law to hold.

(たかやま・りんたろう 東京大学大学院博士後期課程 3 年)